DEW
stream 2018

Planning, Design, and Consulting
SHIMIZU CORPORATION

vol.78

02 - 05　習志野市 新庁舎
06 - 09　松戸市立総合医療センター
10 - 13　東京大学総合図書館 別館
14 - 15　東映アニメーション新大泉スタジオ
16 - 17　ヒューリック渋谷公園通りビル
18 - 19　G-BASE田町
20 - 21　三菱鉛筆新本社プロジェクト
22 - 23　秋葉原アイマークビル
24 - 25　穴八幡宮 布袋尊覆屋・御手洗舎・御井舎
26 - 27　福岡空港貨物施設移転整備事業
28 - 29　新千歳空港国内線旅客ターミナルビル改修工事
30 - 31　TMGあさか医療センター
32 - 33　東京成徳大学 6号館 グローバルセンター
34 - 35　日本女子大学目白キャンパス将来構想 図書館棟
36　テレビ新広島新社屋
37　秋田放送新社屋
38 - 39　カンファレンススタジオフクラシア丸の内オアゾ・ホテルフクラシア晴海
40 - 41　鈴之助本店
42 - 43　南通キユーピー 事務棟
44 - 45　石屋製菓株式会社北広島工場
46 - 47　博多第一幼稚園
48 - 49　W.atelierショールーム
50　ヤマダヤ本社建替計画
51　関西キユーポート新築工事
52　天使大学キャンパスマスタープラン
53　森ノ宮医療大学 新校舎新築計画
54 - 55　ダルマワンサタワープロジェクト
56 - 57　2018年度日本建築学会技術部門設計競技「青空Co-En」
58 - 60　作品データ・委員一覧
61　組織表

DEW
stream 2018

ひとりひとりのDEW、それぞれの想い
ー 近作プロジェクトを通じて ー

vol.78

NARASHINO CITY HALL
MAKOTO KURASHINA ／ HOTTAKA SANO

まちの魅力を発信していく『ひろば』のような庁舎

―デザインビルドならではの三者協働におけるデザイン発展のプロセス―

藏品　誠　意匠設計　2000年入社
佐野　穂高　意匠設計　2012年入社

NARASHINO CITY HALL
習志野市 新庁舎

低層階市民ロビーを繋ぐ大階段

5mの高低差を繋ぐ外部大階段

大橋（DEW）：習志野市庁舎はデザインビルド方式を採用し、基本設計と実施設計＋施工を分離した発注方式です。デザインビルドならではの設計を通して感じた魅力や、シミズだからこそ出来たデザインについてお話をお伺いできればと思います。

御要望への回答と3者での信頼関係の構築プロセス

藏品：実施設計期間の最初に、基本設計内容の調整や新しい御要望を反映するための基本設計調整期間がありました。プロジェクトのスタートと同時に短時間で実施設計に入るためのベースを構築するのはハードな作業でしたが、基本設計時点での課題に対して、当社が設計と施工の両側の観点から新鮮な視点で取り組むことでより良い方向に向かっていくプロセスは、大変有意義な時間であったと思います。

佐野：庁舎施設という特性上、機構改革や各課からの御要望に伴う変更が基本設計調整期間から随時発生しました。実施設計からのスタートだからこそ、基本設計での意図を大切にしながらまずは御要望1つ一つにお答えしていくことで、3者（発注者・基本設計者・実施設計者）の信頼関係が構築できていったと思います。その上で、当社のオリジナリティを深めていくさらなる提案を重ねていきました。

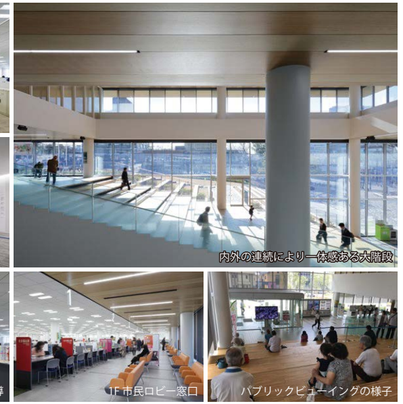
敷地固有の『地形に沿わせた』配置・低層部の計画

大橋：今回建物を訪れた際に、駅からの自然な流れで建物に入って行けたと感じます。建設の経緯や配置計画のポイントについて教えて頂けますか。

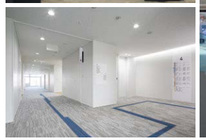
藏品：東日本大震災により旧庁舎が被災した影響で、庁舎建設の検討が本格化しました。敷地は旧市立習志野高校の跡地で、市民の方の憩いの場である緑道『ハミングロード』が敷地内を走り、5mの高低差を持つ敷地です。

佐野：この高低差は、特有の地形である『谷津』という浸食谷と大地の境目に位置することによるもので、高低差に沿わすように建物を配置していることが基本設計からの計画の最大のポイントです。敷地両側からアクセスが可能で、通り側には大階段状の『ハミングひろば』を配し、回遊性を持つ低層部窓口部門の動線計画と併せて周辺から自然に人が訪れ、市民の方の活動の拠点となる『ひろば』のようになることが意図されています。

藏品：『ハミング階段』では竣工時に市の中学生によるブラスバンド演奏会が行われたり、先日訪れた際には市立習志野高校の甲子園予選のパブリックビューイングが行われている等、日常的にご活用頂けているようです。



内外の連続により一体感ある大階段



リズミカルなサインによる誘導

1F市民ロビー窓口

パブリックビューイングの様子

ピアノの鍵盤を模した吹抜壁面を持つGF市民ロビー窓口

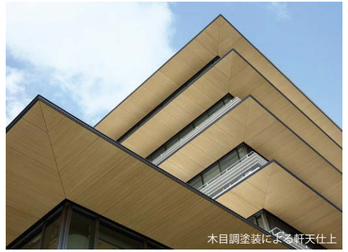
市を象徴し、『市の顔』となる外観イメージづくり

大橋：市庁舎の設計施工は当社にとって初めてというとても貴重な機会であったと思いますが、建物デザインとしてはどういった所に重点を置かれたのでしょうか。

藏品：バルコニーと大庇により水平性を強調し、地形が積層したような力強さと繊細さを併せ持つ外観イメージが特徴です。庇屋根の薄さやルーバー、連窓サッシュの詳細や軒天仕上に御提案した新技術『木目調塗装』等、市を象徴し、市の顔となるために、モックアップをつくりながら3者でブラッシュアップしていきました。

市民が親しみと誇りを持てる『通いたくなる』デザイン

佐野：習志野市は全国レベルを誇る小中高の吹奏楽部がある等『音楽のまち』が市のブランドとなっています。ハミングひろばに加え、ピアノの鍵盤を模した吹抜壁面やタイル・天井パターン、サイン等を用いた五線譜やリ


木目調塗装による軒天仕上

木目調天井塗装の様子

市の中学生によるブラスバンド演奏会の様子

習志野市
新庁舎建設本部(当時)
笹森 洋輔 様

竣工セレモニーの様子

ズミカルなイメージ等の、音楽を演出するデザインを強化しました。また議場は旧庁舎イメージを踏襲したいという御要望を反映しながら、天然木壁面の凹凸と天井形状で市の市章を表現する等、市民の方に親しみを持って頂けるよう工夫しています。

DBのメリット
民間の技術の活用について

大橋：ここからは市庁舎建設の際の習志野市様の御担当者、笹森様を交えてお話を伺います。実際にデザインビルドを採用されてどのようなメリットがありましたか。

笹森：従来発注方式では、設計者と施工者が別で、建築工事、機械工事、EV工事、設備工事などたくさんの工事があるなかで、設計施工が一体となることで、民間の技術、ノウハウを活かしながら良い建物をつくり、かつ期間の短縮ができたのがよかったですね。また公共空間を有効活用した例として、市民交流スペースが挙げられます。普段は憩いの場として利用されていますが、窓口部門の繁忙期には待合スペースとして利用することで十分な広さが確保できています。

ゼネコンならではの
意匠構造設備一体的な提案

藏品：総合評価方式での入札時に柱スパンを拡張する提案をさせて頂きました。フロア両サイドの機械室からの設備ルートを中央に集約し、その部分のみ梁せいを抑えることで、平面を大きく変えることなく実現出来た意匠構造設備一体となった提案です。これが免震装置数の減にも繋がり、コスト低減、工期の短縮にも繋がった総合的な提案で、シミズならではの技術だと思います。

佐野：庁舎は時期により窓口の来訪者の数に大きく違いがあるので、単純な待合スペースとして場所を確保するのではなく、共用部を如何にフレキシブルに使っていける場所にするかに重点を置き、詳細を詰めていきました。

地形の積層による水平性と繊細さを表現した外観

旧庁舎イメージを踏襲した議場

敷地高低差に沿うような配置計画

旧庁舎議場

習志野市 市章

要求水準の達成と
デザインの作り込み

藏品：『要求水準』により建物が必要とする諸条件が規定されているため、設計を進める中で水準を満たしているかの確認が重要な作業でした。

笹森：様々な提案があった中で、要求水準を満足出来ているのか確認することも発注者側として苦労した部分ですね。

佐野：一方で、要求水準をクリアした中での提案を実施設計以降繰返し行い、より良い計画となるものについては御採用頂けるようになっていきました。積極的に議論に応じて頂ける関係がある中で、日々ブラッシュアップしていったと思います。特に外装の詳細や、音楽のまち習志野のコンセプト強化については、3者で重点的に作りこみが出来たと感じています。

笹森：どこの自治体も自分の自治体らしさをどう表現したらよいのかとても悩んでいるようで、地形を活かしたデザインや音楽の要素は分かり易く『らしさ』を表現出来るので、そこが良かったのではないかと思っています。

公共的な建物への思い

大橋：最後にプロジェクト全体を通しての感想等頂けますでしょうか。

藏品：職員の方々との打合せの中で語られる言葉から、旧庁舎への愛情ともとれる温かみを感じることがありました。この新庁舎も同様に多くの方に愛される建築として育ってほしいと思います。心を和ませる雰囲気をもったハミング広場がその役目を果たしてくれると信じています。

佐野：市庁舎という公共的な建物の設計に携ることが出来、とても貴重な経験となりました。市民の方々に向けての竣工見学会の際に大行列が出来ていた光景は非常に嬉しいものでした。こういった建物は使われていく中で価値が高まっていくと思いますので、開かれた庁舎として活動に溢れる場になっていくことを期待しています。

MATSUDO CITY GENERAL HOSPITAL
KOUICHI KATSUKI ／ ATSUSHI ITOH

建築が病気のこどもとその家族にできること

―自らの体験を活かした設計者の熱い想い―

香月　孝一　意匠設計　2008年入社
伊藤　淳　意匠設計　2006年入社

MATSUDO CITY
GENERAL HOSPITAL
松戸市立総合医療センター

こどもと家族の面会室

小児病棟 スタッフステーション『わかば』

小児病棟スタッフステーション『そら』

訪れる人が心やすらぐ空間

富田（DEW：600床というデザインビルド（DB）方式による設計施工の病院では、最大規模となった松戸市立総合医療センターですが、どのような特徴を持った病院なのでしょうか。また、設計を担当されたみなさんは、どのような想いで設計に取り組んで来られたのでしょうか。

幼少期の頃の想いを胸に秘め

香月：松戸市総合医療センターは急性期・高度医療を提供する大型自治体病院です。重篤な患者を24時間受け入れる三次救急を担い、地震時の医療救護活動で中心的な役割を担う災害拠点病院に指定されています。また、小児医療や周産期医療に特に力を入れている事が特徴です。今回の新築移転計画においては、小児・周産期医療センターの充実が特に重要なテーマでした。

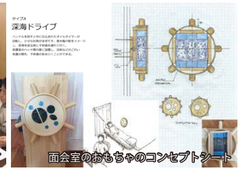
個人的にも新生児、小児エリアにはこだわりがありました。私は10歳まで入退院を繰り返していたので、幼少期はNICU等の集中治療室や小児病棟で過ごしました。授業は病院学級で受け、友達になった同年齢の友達が急に死んでしまう事もありました。

そんな入院生活の中で私の唯一の楽しみだったのが、一週間に一度だけの扉越しの家族との面会でした。家族が面会に来る日は朝から嬉しくて、いつもは苦しい治療もその日は平気でいられました。ただ、家族が帰る時は寂しく、母も泣いていた記憶があります。

そこで、家族との面会のひとときの空間を最重要空間と考え、感染し易く面会が制限されているこどもでも家族と面会できるような易感染患者用の面会室をつくりました。家族と患者の間に大きなガラスをはめ込み、マイクとスピーカーを設置してこどもとその家族が、楽しく過ごせるようにカラフルで遊び心のある空間が実現できました。

赤澤　知也　FIELD FOUR DESIGN OFFICE

東京木工所での打合のようす



面会室のおもちゃのコンセプトシート

21世紀の森に囲まれる病院

さまざまなおもちゃ

アメリカ留学で学んだ「患者の笑顔は家族の笑顔から」

伊藤：わたしが社内の留学制度でアメリカの設計事務所に一年間留学をさせて頂いたときに、現地の様々な病院を見て学んだことは、「患者を笑顔にするには家族を笑顔にすることから」ということです。アメリカの病院は、患者だけでなく、その家族のための空間に多くのスペースを設けています。家族が安心できる空間では、患者も落ち着いて過ごすことが出来るのです。

今回の松戸市立総合医療センターでは「Family Centered Design」をコンセプトとし、不安に押しつぶされそうなご家族に対し、建築の工夫によりその不安を少しでも軽くすることができるのではないかと考えて設計に取り組みました。先ほど香月さんが説明した家族面会室をはじめ、小児病棟は特にこのコンセプトを体現できたと思っています。

松戸の21世紀の森に溶け込む

富田：フィールドフォー・デザインオフィスの赤澤さんは、内装計画に携われたそうですね。コンセプトや実現できたことを伺いたいです。

赤澤：この病院は周囲を、21世紀の森という大きな森に囲まれています。その豊かな自然を病院のなかへ取り込もうというのが大きなコンセプトでした。例えば、小児病棟では緑・水空という2つのゾーンをつくり、床・天井・カウンター・サインなど空間全体でそのコンセプトを表すことができました。自然の色は一色ではないので、様々な緑・水色を使い、自然の中にいるように感じられる工夫をしました。病室の扉の色も一つ一つ違うので、現場の方々には大変な苦労をおかけしたと思います。

また、病棟のどこにいても楽しめる工夫を取り入れています。廊下の手すりに様々な木をぶら下げてみたり、巣箱が壁に埋まっていたり。面会室にあるおもちゃは伊藤さんの力作です。

伊藤：小児科の先生に頼まれて、おもちゃをつくりました。自分でしかけを

島津　勝弘氏　島津環境グラフィックス

アート『氷』

アート『ねぎ』

エスカレーターホール
アート『生長の木』

2階 ホスピタルストリート
アート『大地』（右）

六中アートのようす

考えて、サンプルを作成して。最後は東京木工所に依頼して製作しました。こどもの病棟というとキャラクターの絵を取り入れたりしがちですが、実際は0歳から15歳までのこどもたちが入院しています。「おもちゃ」とは言え、こどもっぽさは控え、患者の家族や兄弟、スタッフまでもが楽しめるようにデザインしました。小児科の先生からはこどもたちが喜んで遊んでくれていると聞いています。

中学生とのコラボレーションアート

富田：ここからは、院内のアートを手掛けられたサインデザイナーの島津勝弘さんを迎え、そのプロセスを伺います。

島津：エントランスや外来待合にあるアートは病院の近隣にある中学校の生徒たちに参加してもらって製作しました。わたしはこれまでに市民参加のアートなどを手掛けてきましたが、鳥山さん（元松戸市立病院プロジェクト設計室室長）に松戸でもそのような試みをしたいと相談されました。病院・市の教育委員会に話をもちかけたところ良い返事を頂き、病院建設地のすぐ近くにある松戸市立第六中学校（六中）の生徒たちに関わってもらおうということになったのです。

まず、六中の美術部を中心にアートのテーマを考えてもらうところから始めました。「もしお母さんが治らない病気になってしまったら、親友が入院したら、あなたはどうしてあげたい？その気持ちをアートを通じて届けよう！」と呼びかけたところ、彼らが考え出したテーマは、松戸の豊かな自然から抽出されたものでした。最終的に絞られたテーマは「大樹」「水」「大地」「ネギ」。ネギは松戸の特産品です。それらを中学の3学年＋卒業生全員にピースをつくってもらって、最後はこちらで構成・配置を行うという手法を見出すことができました。あくまで最後の味付けを行っただけで、大方は黒子に徹しました。

赤澤：中学生全員参加でアートをつくるということは、みんながひとつの建築をつくる事に関わるという点で、とても重要なことだったと思います。

島津：初めは乗り気じゃない生徒たちもいざワークショップで作る段階になるとどんどん前のめりになってくる。また、中には暴走する生徒も出てきます。暴走しても良いように、色の範囲などはある程度指定して全員のピースを全て使えるようにしました。実際は生徒たちが製作したものをアートとして飾れるように構成する点が一番苦労しましたね。一日がかりで並べ方を試行錯誤しました。

香月：建物が完成して初めて生徒達自身は、自分達がこの病院の建築の一部をつくった事に気づくのでしょうね。そして彼らが大人になり、こどもをこの病院に連れて来た際、「この葉っぱはパパがデザインしたんだぞ。」と胸を張って伝えてほしい。そうすることで、彼らにとって、病院というより、一緒に造った身近で楽しい場所になり得ると考えています。

オペホールも森をイメージしている

患者や医者を運ぶ屋上ヘリポート

サーカディアン照明を用いたNICU

いままでを振り返って

伊藤：実施設計からのDBでしたが、わたしたちの想いを乗せ、シミズとして誇れる設計ができたと思います。単にデザインするだけでなく、どうすれば安全で、長く使ってもらうようにつくれるかまで考える事が大切だと思います。何十年もありつづける大病院で、島津さんたちの力を借りて、非常に細やかなところまでデザインすることができました。おかげさまで、お披露目のときには多くの人に喜んでもらえたことが嬉しかったです。

香月：この施設の本来の機能は高度な医療の患者への提供です。目に見えないところには、病院としての高機能な設備がぎっしりと隠されています。この高機能を柔らかなデザインで包みこむ事で、患者や家族の心が少しでも安らぐような空間を実現できました。このプロジェクトを通して、病院建築とは、患者が病気や痛みを一瞬でも忘れられる、重篤な患者を抱える家族が笑顔になれる、ひとときの場所をつくる事ではないかと感じています。

議論の記憶を刻む『知の円形劇場』

― 土木と建築の技術が結集した全面地下図書館 ―

稲場　万頴夫　意匠設計　1988年入社
岡山　雄太朗　意匠設計　2011年入社

THE UNIVERSITY OF TOKYO
GENERAL LIBRARY ANNEX
東京大学 総合図書館 別館

安田（DEW）：地下に埋設された図書館、という神秘的な構成をもつ図書館ですが、どのような図書館、どのような空間を目指して設計を進められたのでしょうか。

稲場：東京大学総合図書館別館（以下別館）は、基本構想を東京大学から示され、基本設計～工事監理までを技術提案型デザインビルドのプロジェクトです。東大本郷キャンパスの計画要綱から景観軸の起点となる広場は新たな要素を作らないことが定められていたため、別館は全面地下建築物とすることが求められ、総合図書館本館（以下本館）前広場の地下46mまで達する300万冊収蔵の自動化書庫と、能動的学習の場『ライブラリープラザ』で構成する施設となっています。

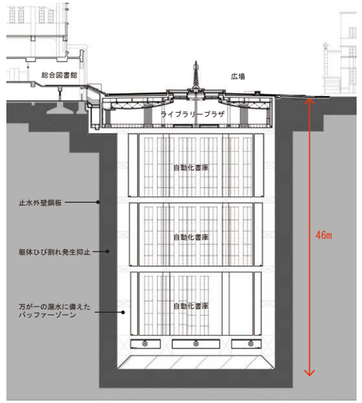
図書館を地下に埋設する

大橋（DEW）：設計担当の稲場設計長、圓山さん、設計監修をされた東京大学川添研究室の神本先生、総合図書館の皆さま、エンジニアリングオフィス（施設部）の沼田様をお迎えして、お話を伺いたいと思います。

まずは別館建設のきっかけと図書館を地下に埋設された計画の経緯などをお話しいただけますでしょうか。

原（総合図書館）：東京大学柏キャンパスに自然科学系の保存書庫がありますが、文系の先生方は、コピーだけでなく論文や本そのものをすぐに手元で見たい。そのため本郷キャンパスにも書庫が必要だが現状保管スペースの余地がありません。そのため書庫の新設が必要、という流れで本計画が始まりました。

建設場所については、ペンシルビル型書庫を本館中庭に建てる、本郷キャンパスの近くで新築する等、いろいろな意見が出ていましたが、最終的には利便性を考慮し、本館の近くが良い、という結論に達しました。



地下自動化書庫内観(書架設置前)

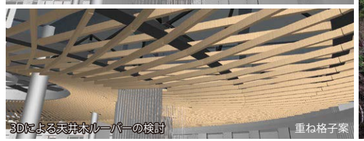
モックアップによる確認

ホルバー用杉材の伐採

ニューマチックケーソン工法

放射格子案(採用案)

クロス格子案


重ね格子案

3Dによる天井ホルーバーの検討

神本：昭和3年に竣工した本館に増築した場合、既存遺構及が発生し本館そのものの改修が大規模になるが、重要な文化財でもある本館はできるだけ既存のまま保存したい。また本館前の広場も貴重な空間で歴史的価値も高いため保存したい。そこで、今回別館は地下の図書館にしよう、というプランになりました。

沼田：『地下埋設の図書館』という方針はまとまったのですが、非常に難易度の高い施工条件でした。歴史的価値の高い既存建物が近くに建ち並び、また大学キャンパス内のため、振動・騒音の大きな低減が期待されました。その解決方法として、『ニューマチックケーソン工法』を採用することにしました。この工法は、コップを逆さまにして平らに水中に押し込むと、空気の圧力により水の浸入を防ぐことができるという原理を応用したもので、地上で下部に作業室を設けた鉄筋コンクリート製の函（ケーソン）をつくり、その作業室に地下水圧に見合う圧縮空気を送り込むことで地下水を排除することでドライな環境で工事が行える工法です。図書館新築工事では業界初の試みで、日本を代表するゼネコンである「清水建設」の技術力を発揮していただきました。

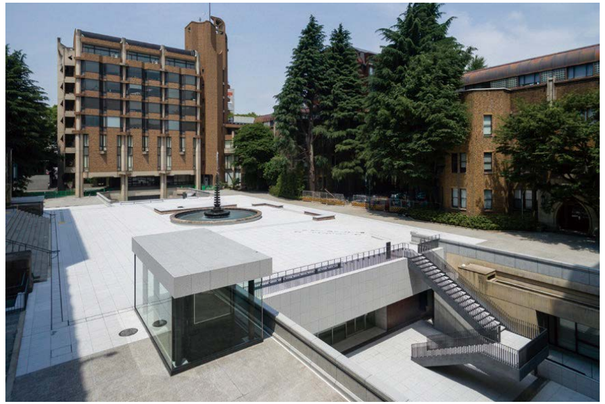
議論の記憶を刻む和の空間

『知の円形劇場』

安田：設計を進める中で、参考にされた空間イメージや、そのイメージを実現するために検討されたことがありましたらお聞かせください。

神本：最近の大学の講義形式も、今までのように一方向の講義形式の授業でなく、アクティブラーニング的な学習形式をとる大学も増えています。東京大学本郷キャンパスにはそのための場所がなく、知の集積である図書館のそばにつくりたい、という要望が全学的にありました。そこで、それらの要望を今回計画へ組み込み、一つのプロジェクトとして進めました。

図書館前の広場に面して、内田先生の後を継いでキャンパス計画をされた大谷幸夫先生が設計された文学部3号館、法学部4号館が建っています。両建物とも地下一階レベルには、落ち着いた雰囲気のいいサンクンガーデンがあります。



再生された広場のベンチ

広場の床に復元された遺構

旧図書館基礎の煉瓦の遺構を保存し、広場のベンチとして再生

江戸時代の加賀藩邸排水溝遺構を広場の床に復元

そこで、新図書館の入口はこれらのサンクンガーデンに面して配置し、あわせて能動的学習の場である『ライブラリープラザ』を設けることになりました。

稲場：ライブラリープラザは東京大学から、多くの学生が集い議論する世界一賑やかな、知の円形劇場にしたいという要望が示されました。そこで、輻射冷暖房を組み込んだ縦格子でゆるやかに仕切られたグループセッションスペース、チュータリング等の二ーズに応える小空間を作り出す一方、連続する円形ホワイトボード壁、中心に向かって上昇する天井木格子と中央の噴水トップライトからのゆらぎのある光を導入することにより、一体感を感じられる空間を目指しました。別館は地下階にて、関東大震災による火災で焼失した旧図書館を建て替えた本館と接続します。本館はよく知られているように、後に総長となる内田祥三がデザインした、いわゆる「内田ゴシック様式」です。これと対をなす別館は、逆に和を感じられる空間デザインにしました。東京大学は留学生が多く、世界から集まった学生が、日本の東京大学という場で議論を展開したという記憶を刻み込んで欲しいとの思いからです。

原：現在は自習スペースとして、静かに学生さんたちが使ってくれており、ピーク時は満席になる時もあります。今後は勉強会や研究会での利用やイベントの開催も可能とし、活発な議論の場として使っていく予定です。

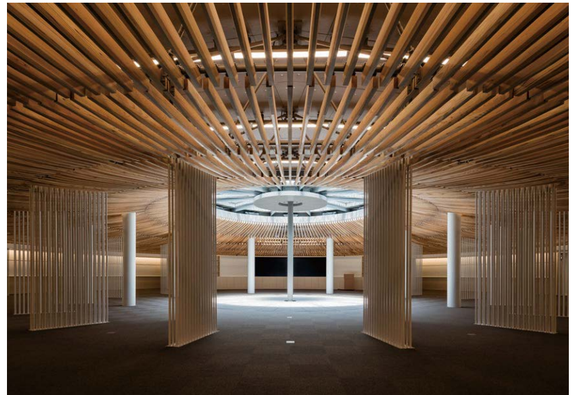
100年スパンで継承するものを考える

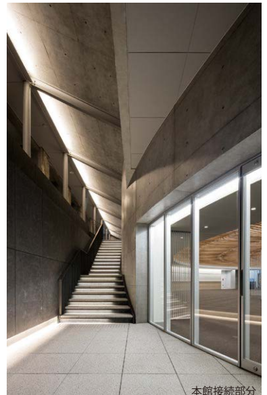
大橋：神本先生は改修やリノベーションがご専門ということですが古い図書館に対して新しいものをつくる、今回の計画で最も意識されたことは何でしょうか。

神本：ポイントは技術的な点と歴史的な点の2つあると思います。技術的な点については、本館への既存遡及を避けるために別棟としながら、地下空間を介して行き来できるようにしたことです。

歴史的な点については、100年スパンで考えた場合、旧建物を全く同じかたちで継承するよりも、その時代の新しいものを取り込むのがよいと考えました。

プロジェクトにかかわられた東京大学の方々





本館接続部分

今回新しく完成したライブラリープラザは、木を使用したデザインを何度も稲場設計長をはじめとした清水建設の方々と議論をし、現代的な空間が実現できました。また、輻射空調をはじめとした最先端の技術も盛り込まれており、新旧のコントラストが際立った良い施設になったと思います。

多くの方の思いと設計をまとめ上げた達成感

大橋：実際に使われ始めてからの印象や、設計、工事期間を振り返っての感想をお聞かせください。

原：ライブラリープラザは地面から数メートル下にあるだけなのに、地上とは全く違う世界に感じられ、非常に良い空間だと思います。人のたくさん集まる広場の下に静寂に満ちた空間が突如出現し、驚きと感動をもって受け入れられています。

新しくなった噴水の周りは、学生さんがよくノートパソコンを広げて座っています。図書館の遺構を使ったベンチは、ちょっと変わった形だったり大きさだったりしますが、寝そべっている学生などもいて、みな上手に使いこなしていると思います。夕方も夜も人が集まっており、大学の自由な雰囲気を感じられ、当初想像していたイメージよりずっと満足する図書館をつくりあげることができました。

稲場：設計は清水建設土木本部との連携、接続する本館の調査、既存噴水の改修方法の検討、本館と別棟増築とするための都庁協議など、初めて経験することばかりであり、10か月の設計期間は非常に短く感じられました。図書館という水を嫌う用途でありながら地下46mに達する建物であること、噴水（相輪塔）から流れる水を常時蓄えるトップライトを設けている点など、過酷な与条件も多かったのですが、一歩ずつ解決しながら設計をまとめ上げた時の達成感は何にも代えがたいものとなりました。多くの学生に使われている場面を見るたびに、いままでの苦労も報われる思いです。

TOEI ANIMATION OOIZUMI STUDIO MAIN BUILDING

TAKEHIRO SADAHISA ／ RYOJI SATSUMA ／ MAI NAKANO

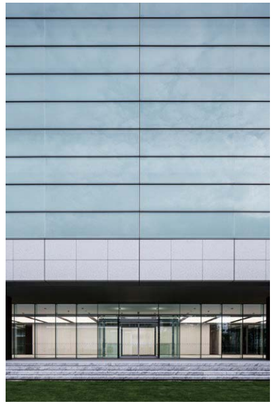
アニメ業界の未来への提言となるスタジオ

―アニメの聖地として愛される建物を目指して―

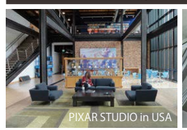
定久	岳大	意匠設計	1992年入社
薩摩	亮治	意匠設計	1997年入社
中野	舞	意匠設計	2012年入社

TOEI ANIMATION OOIZUMI STUDIO MAIN BUILDING

東映アニメーション新大泉スタジオ



フロアフロー空調、セラミックプリントを施したダブルスキン、免震構造など様々な技術を取り入れる



PIXAR STUDIO in USA

アニメーターの働く環境を変えたい

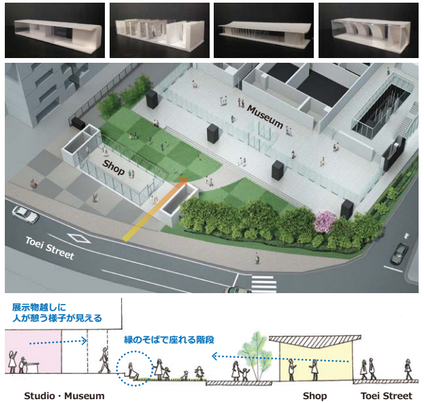
東映アニメーションは、1956年創立のアニメーション制作会社の名門です。打合せを通じて、アニメーションの制作は、その工程の大半が個人の能力と労力に委ねられる創作活動であることを認識しました。特に動画においては大量の成果物を短期間に求められる大変な仕事です。アニメーションが好きであるからこそ耐えられるといった職業に対する情熱は素晴しく感じつつ、より働きやすい環境を提供したいと思いました。

アニメ製作に適したスタジオ

新しい建物は海外のアニメーターが見ても優れているべきと考え、世界の最先端アニメ・映画企業を施主と共に巡り、目指すべき空間イメージを共有しました。そこで今回適していると考えたのは個人作業の集積であるアニメ制作の現場を相互に俯瞰できるよう、ワンプレートの大空間にすることでした。縦にはガラスELVのつながりを持たせ、アニメーター同士を刺激しあう空間を創ります。スタジオ空間はこのスタジオのために配光・調光が可能な照明を開発し、空調は全面床吹出のタスク&アンビエントとしました。天井からの漏水リスクがなく、企業の資産であるアニメ原画を守りながら、個人の快適空間を実現しました。

こだわりあるものづくり

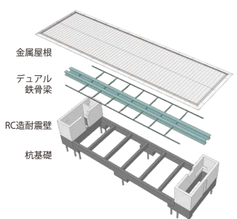
綿密なスケッチや納まり図を初期段階から作図し、それを基にCGを描くことで実現する空間を正確に表現しました。シンプルな形に散りばめられたディテールが建物の純度を高め、アニメーターの集中力を向上させます。こだわりあるものづくりには自分が一本一本線を引くことの積み重ねであることを学びました。



門のようなショップ兼守衛所が地域とスタジオをつなぐ

スタジオ前には別棟でショップと守衛所を併設した建物を計画しました。敷地の前面道路は「東映通り」と呼ばれ東映アニメーションが古くから地域に根付き、愛されていることを感じます。アニメファンに愛されるかたち、子どもが好きなかたちなど模型でスタディを重ねた結果、「門」のようなかたちとし、地域や世界につながるゲートの役割を持たせることにしました。

2つのRC造のコアに長さ22mの鉄骨梁を架け、門形の構成を実現しました。端部をキャンチレバーで持ち出し、厚みを感じさせないシャープな屋根で輪郭を創りました。



訪れた子どもたちが未来のアニメ産業を支える

施主と一緒に悩み、多くのプロフェッショナルの力を集積して作り上げた建物。アニメーターが誇りを持ち、アニメを見た子どもたちがその創作風景を見て憧れる：設計チームの原動力は単なる労働環境の改善ではなく、大変な労力を必要とするアニメ産業の未来への提言となるスタジオをつくることでした。このミュージアムに訪れた子どもたちがアニメに憧れ、さらに優れた作品が生まれることを願います。

『光のきらめき』を纏ったファサードの実現

―奥行き190㎜の中に更新性を備えたディテールのつくりこみ―

永石　貴義　意匠設計　2013年入社
文　由佳　意匠設計　2015年入社

Hulic Shibuya koen-dori Building
ヒューリック渋谷公園通りビル

公園通りのランドマーク

本計画は、渋谷公園通り沿いのパルコPart2跡地に建つ商業施設です。低層階にはアパレルとホテルの融合した新業態の旗艦店、上層階は1チャペル2バンケットで構成されるブライダルが入居しています。事業者の掲げる「長寿命化、BCP、環境」という3つのコンセプトを基軸に、渋谷公園通りの新たなランドマークとなることを目指して取り組みました。

光のきらめきを表現

長寿命化のコンセプトの一つとして、将来ファサードを更新できるよう、止水面と化粧材を分離する構成が求められました。商業施設として専有面積を最大限確保する中で、止水面から敷地境界線まで化粧材が設置できるスペースは、190㎜という限られたものでした。僅かであっても与えられた奥行きを最大限活かすにはどうしたらよいか検討を行い、宇田川や公園通りといった、水面や木漏れ日を想起させる地名から、光のきらめきや陰影を三角形の傾斜した多面体で表現するコンセプトを考えました。

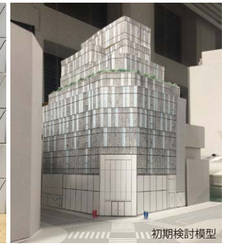
当初は、アルミパネルの多面体によってファサード全面を覆い、所々パネルの無いところを窓とする案でした。事業者にも好評を頂き設計を進めていましたが、テナントのリーシングが始まると、テナント側から「もっと窓がほしい」といった様々な要望がでてきます。悩ましい問題ですが、案をブラッシュアップする機会と捉え、コンセプトは変えずに、別の方法でテナントの想いにも応えられるよう検討しました。

最終的には多面体によるアルミキャストのルーバーに変更し、アルミカーテンウォールの方立もしくは方立間の中間に設置するというルールを設定し、テナント設計者とも調整しながらルーバーの設置個所を決めました。

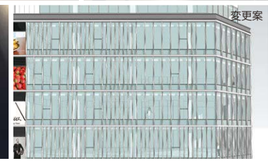
テクスチャーの検討

照明の検討

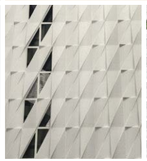
3Dプリンターによる検討



初期検討模型



変更案



当初案

夜景

エントランス

モックアップ

光壁

ファサード詳細

ディテールのつくりこみ

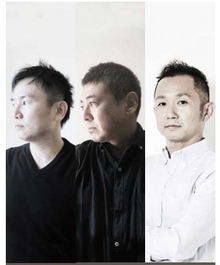
多面体のファサードを実現するにあたって、3Dプリンターや実寸の模型によって検討を行いました。アルミキャストは鋳物であるため、表面にテクスチャーをつけることができます。どのようなテクスチャーがいいか、ライティングの効果はどうか、照明デザイナーとも協働し、検討を重ねました。また設計技術部の協力を得て、化粧材が脱落しないフェールセーフの機構を備えたディテールのつくりこみをしました。最終的にはモックアップを作成し、関係者全員と検証・確認を行いました。

コンセプトを細部にまで展開

エントランスのデザインにも、ファサードのコンセプトを展開しました。当初のファサード案である傾斜したアルミパネルによる幕板、塗装の艶と色を変えたパネルをグラデーション状に配置した壁と天井、ステンレスのヘアラインの向きを変えて組み合わせた、平面でありながら陰影をもつ光壁など、コンセプトを様々な方法で実現し、建物の固有性を高めるようにしました。

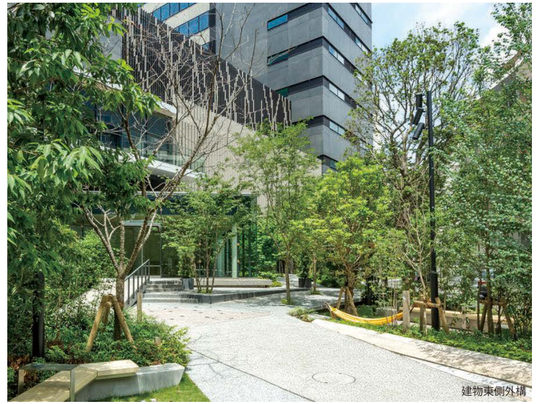
またファサードの更新性以外に、オイルダンパー設置による付加制振構造、災害時を想定したインフラの確保、将来の更新を円滑にする設備バルコニーなど、長期に渡り建物の価値を維持し、建物の長寿命化を可能にする工夫を盛り込みました。永く人々に愛され、街のランドマークとなることを願っています。

Wellness Office
―これからの多様な働き方をサポートするワークプレイス―



小山　裕之(中) 意匠設計　1994年入社
宮崎　浩英(右) 意匠設計　2007年入社
大久保　敏之(左) インテリアデザイン 1992年入社

G-BASE TAMACHI
ジーベース田町


建物東側外構

東側外観

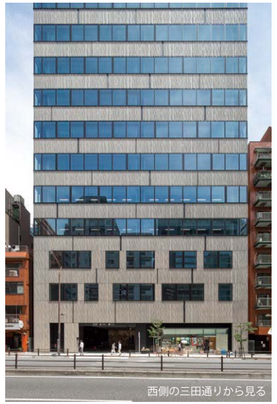
Wellness Office

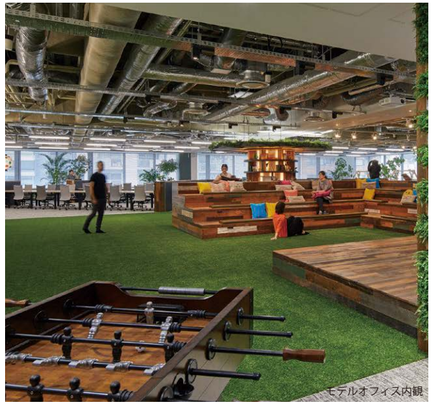
イノベーションを求める企業は多様な働き方をサポートするワークプレイスや、人・企業の成長に対し短期に柔軟に対応可能なオフィスを求めています。また、省エネという社会的環境配慮は勿論のこと、ワーカーの心身を健康にし、幸福感を感じて働ける環境こそが企業の成長につながるという考えが広がりつつあります。それらを踏まえ三井不動産と清水建設の共同事業であるこのテナントオフィスでは、今までとの差別化と新たなマーケットリーシング展開のモデルとなる提案を目指しました。

敷地はＪＲ田町駅、札の辻交差点の至近に位置し、周辺はメーカー企業、大学の学術機関など多様な用途が集積しています。テナントターゲットは時代の変化に敏感で、今後成長が見込まれるスタートアップ企業としました。スケルトン仕上げの４面採光のワンルームをキャンバスに、テナントそれぞれが理想とするワークスペースを自由に描けるフレキシブル性と機能性・身体性・遊び心を刺激する、しかけやスペースを共用部の随所に配し、メンタル、フィジカル両面に寄与する Wellness Office としています。

大樹と林床

不整形な敷地の三田通り側に27ｍ角の高層のオフィスプレートを積層し、第一京浜側に伸びる長さ50ｍ、高低差１・５ｍのエリアをアプローチ空間と低層オフィスで構成しました。高層部は企業や立地の成長性を期待し「大樹」として表現し、低層部は大樹の足元に広がる「林床」と見立てました。このコンセプトとその実現には佐藤尚巳建築研究所の力を頂戴しています。大樹の外装はランダムなリブを付けたＰＣａ板に木目パターンを転写し、あたかも樹皮のごとく陽射しの移ろいに応じ様々な表情を見せる様にしています。


西側の三田通りから見る


モデルオフィス内観

東京タワーを一望できる屋上庭園

大樹の足元の林床をイメージした外構は四季を彩る多様な植栽を配置し、ワーカーや地域にとって貴重な緑陰の空間を提供し、カフェ、ベンチ、ハンモック、卓球台等も配され、心地よいサード・プレイスとして利用されています。

「G-BASE」

建物は「G-BASE」と命名されました。Ｇは Growing…多様な働き方を支援する場。そして Green …緑に囲まれた心地よい空間、BASE は秘密基地のような空間であり、世界に羽ばたく企業の成長拠点、といった意味が込められています。事業者、デザイナー、設計者、施工者がものづくりの想いとプロセスを共有し一つ一つを具現化してきました。

外装計画

外装は大樹の樹皮を表現するリブ付ＰＣａ板、中間期・ＢＣＰ用の自然換気装置、４面採光の横連窓といった特徴があります。ＰＣａ板は樹皮のような不均質なテクスチャを創りだす様、リブに勾配加工を施し、着色もコンクリートの素地色を生かしたものとしました。季節風の風圧の差異を利用し、高層階は４周に自然換気装置を配置、隣地に挟まれている低層階は前面道路側１面とし階段室を利用した重力換気となっています。リブ底のアクセントカラーと換気装置をランダムに施すことで大樹の節を体現。スケルトン仕上の４面採光のワンルームオフィスは、空間に開放感とテナントリーシングのフレキシブル性を高めています。

外装PCa板の風合いを現寸モックアップにて確認

コーポレート・アイデンティティの表現

―uni-ブランドを表現する建築を目指して―

東田　淳行　意匠設計　1996年入社
原　宏佑　意匠設計　2014年入社
山本　大地　意匠設計　2016年入社

MITSUBISHI PENCIL
NEW HEADQUARTERS PROJECT
三菱鉛筆新本社プロジェクト

伝統と最先端の技術をもつユニークな企業風土を表現した建築

「鉛筆」という極めてアナログであると同時に、最先端の技術が詰まった筆記具を作ることから始まった、ユニークな企業風土を表現する建築。外装は金属パネルとガラス（ダブルスキン）を使い、工業製品のようなシャープな外観デザインとし、普段身近に接する内装は外観とは対照的に、木の温かみを生かした工芸的で柔らかいインテリアデザインとしています。

この建物の特徴は敷地形状から決まる平面形状にもあります。建物が鉛筆のようなカタチをしているので、目立ったデザインではなくても小さな部分（普段は気づかれないような部分）のひとつひとつに遊び心のある「uni-らしさ」を埋め込むように心がけ設計をしました。

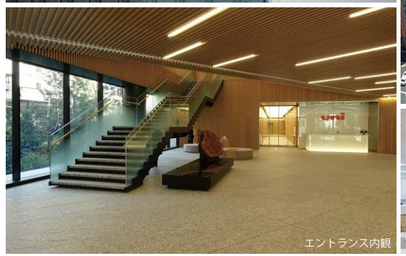
ダブルスキンCWの細部設計

外観のダブルスキンのアウターカバー（白色の部分）を鉛筆のように細長い形状として表現したいと考え、奥の鉛筆がガラスを支えているように見えると面白いのではないかと思いました。今回は技術研究所や外装エンジニアなど多くの方の協力があり、風洞実験、温熱環境シミュレーション等の性能検証を行っています。一方で意匠設計者としては最終的な見え方の検証、操作に多くの時間をかけ、パースだけでなく3Dプリンターで原寸模型をつくり、モックアップによる検証を行いイメージをより洗練させていきました。

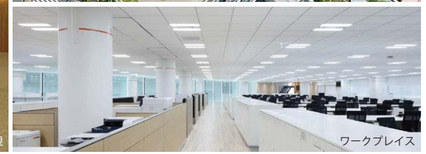
また、ダブルスキン内の床グレーチングは軽量化と剛性の確保のため「I型」のアルミ材とし剛性を確保しました。グレーチングを図とすれば、地の部分に鉛筆が並んでいるように見えます。実際は遠くて見ることは難しいですが、たとえ見えなくても拘りをもってディテールをつくり込みました。

外装ディテール

鳥瞰

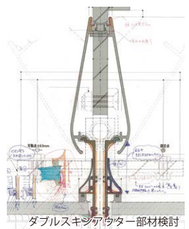


エントランス内観



ワークプレイス

外観コーナー部分



ダブルスキンアウター部材検討

「uniサイン・えんぴつピクト」

サイン計画には鉛筆、鉛筆箱のプロポーションをピクトの各部分に組み込み、色名のある240色のユニカラー色鉛筆の中から各階の色を決定しました。ピクトサイズを決定するために、12ダースの鉛筆箱と1本の鉛筆をベースとし、ピクトの「高さ、幅、太さ」を決定し、その他の部分は鉛筆のプロポーションのサイズを変化させることで全体に統一感をもたせるようにしました。各階のワークプレイスにはベースカラーのラインを細長く水平に一筆書きのように描き、どの場所にいてもユニカラーが感じられるようにしました。

えんぴつロード

敷地内の歩道には鉛筆の製造工程を表現したベンチを6つ並べ、えんぴつが出来るまでの工程を「見て、触れて、感じる」ことができるデザインとしました。この工程を辿りながら歩くことで、敷地内を自然に回遊できることを意識しました。歩道を歩く人の無意識に訴求することで、より自然とえんぴつに親しむことができるような仕掛けを目指しました。

削り加工

鉛筆型削り（両面）

えんぴつロード

AKIHABARA I-MARK BUILDING

MAKOTO KURASHINA ／ HIDEYUKI INABA ／ MOE TAKEUCHI

デザインとエンジニアリングの融合

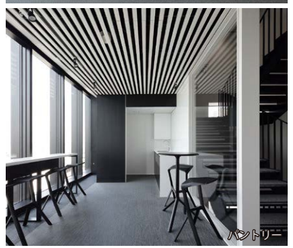
―ものづくりの痕跡をデザインへ昇華することを考える―

蔵品　誠	意匠設計	2000年入社
稲葉　秀行	意匠設計	2014年入社
竹内　萌	意匠設計	2017年入社

AKIHABARA I-MARK BUILDING
秋葉原アイマークビル

構造そのものの力強さを表現した外装

執務室



パントリー

構造体＝外装

秋葉原は、近代の風景を残しつつ変化し続けているまちです。その中で、時代の影響を受けない“強い”建築になることがまちに溶け込む手段だと考えました。RCとS造のハイブリッド構造を採用し、RCそのものの力強さを表現した、合理性と意匠性を兼ね備えた外装です。デザインと構造、環境の分野をいかに一体に考え一つの外装としてまとめられるかが最大のテーマでした。構造美を損なわない様、ライトシェルフといった環境装置を付加しています。また、施工上必要な足場継ぎ兼PC保管用の治具の配置を調整し外装に残したりと、作る過程を昇華させた設計施工としてのデザインを意識しました。内装でも、素材感や職人の手仕事が残るような意匠を意識しました。

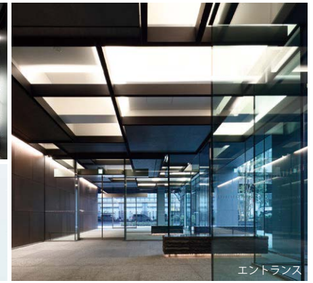
外装の難しさ

構造体である外殻の柱は施工までの期間が短く急ピッチでサッシや庇などの細かい納まりを決めていく必要がありました。毎週、工事長やメーカー担当者、技術部の方々に技術的な助言をいただきながらも外装のものの決めの難しさを経験しました。

また、内側窓廻りは簡易エアフローシステムを採用し、柱型とブラインドBOXに抱き込む形状としています。各担当メーカーの方の理解が難航する中で3Dを利用し形状決定し、実際に実験を行いました。実験前は本当に機能するか不安でしたがある一定の性能が確保できる結果が出せ、窓廻りの快適性を補助することができました。

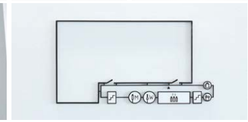
外装主担当：稲葉

外構と連続するエントランスホール



エントランス

WC



エントランスホール壁面

建物と人をつなげるサイン

建物全体のもつムードを引き継ぐことを意識してサインを計画しました。外装の洗練された骨格から、フレームをキーワードとして、ピクトグラムを電子回路図の素子に見立てて、ひとつながりに見えるようなデザインとしました。毎日見る人に飽きさせず、初めて見る人に分かりやすく、というバランスに苦心しましたが、他者の視点に立って見てみる習慣がつきました。

サイン計画：竹内

ECO ＋ WELLNESS

快適で省エネルギーなオフィスを具現化するために、新たな放射空調システムを開発するなどしてZEB Redy、LEED Goldの認証を取得することができました。外装と兼ねるPS Ey-ECOS構法の躯体は徹底したPCa化、工業化工法によって高い品質と精度を有し、開口部にはライトシェルフに加えて、窓際空間のPMV（温熱環境評価指数）が快適域となる環境装置を組み込まれています。一見このような技術の集積に注目されがちですが、空間の快適性やつながりといったオフィスを使うユーザー目線で一つひとつ課題に向き合ってきました。

現在、事務所建築のデザインに「健康」といった新たな課題が生じています。このプロジェクトでは設計初期のコンセプトに健康という概念は顕在化していませんでしたが、社会が求める建築への投資条件の変化を感じ、企画から竣工まで「ecｏ＋BCP」と同レベルで建築の省エネとユーザーの健康を一体のものとしてとらえ追求していたように思います。秋葉原の景観を取り込み、心地良く人と都市とをつなげ、人々の活動が視覚的要素として表れる空間がその成果といえるのではないでしょうか。

ANAHACHIMAN-SHRINE
ATSUKO FUKUMOTO

古図を読み解き現代に再現

―伝統美の再現と長寿命化の実現―

ANAHACHIMAN-SHRINE
穴八幡宮　布袋尊覆屋
・御手洗舎・御井舎

平成元年から始まった境内整備

穴八幡宮は康平五年（一〇六二）八幡太郎義家が創祀したとされる由緒ある神社です。江戸時代には徳川家祈願所として江戸屈指の大社となり、以後数次の造営が行われました。嘉永二年（一八四九）には当社初代清水喜助による随身門の再建も行われましたが、昭和二〇年の戦災により社殿のことごとくを焼失しました。戦後仮社殿により再興していましたが、平成元年より慶安・元禄期の江戸権現造りの古図を基に御社殿の造営がはじまり、引続き付属建物の再建および境内地の整備工事を行っています。

既存境内と調和のとれた外観

今回工事は布袋尊覆屋、御手洗舎の建替と御井舎（手水に給水する井戸、ポンプを納める小屋）の新築です。

既存境内と調和のとれた外観を目指し、布袋尊覆屋、御手洗舎の2棟は切妻造り平入、屋根は緑青銅板葺で軸部を朱塗りとした伝統木造建築としています。穴八幡宮ではこれまでも随神門、出現殿、鼓楼を伝統木造で建築していますが、軸部の接合は金物に頼らない継手・仕口とし、耐震性・耐久性に優れた長寿命な建物としています。一方、御井舎は蔵の形状を模した切妻造り妻入、屋根は瓦葺で鉄筋コンクリート造の強固な建物として計画しました。

それぞれの建物らしさの表現

布袋尊覆屋、御手洗舎は2棟並んだ同規模の建物です。調和を意識しながらもそれぞれの用途にふさわしい表現を心掛けました。布袋尊覆屋は、四本柱に屋根がかかったシンプルな形状として布袋像を引立てます。この布袋像は江戸時代、将軍家光が江戸城吹上御苑にあったものをここに奉納したと伝えられています（現在、オリジナルの

建替前の布袋尊覆屋（左）、御手洗舎（右）

布袋像の水鉢（オリジナル）

出現殿（H18年竣工）

社殿（H4竣工）

鼓楼（H27年竣工）

随神門（H10年竣工）

外観パース：布袋尊覆屋（左）,御手洗舎（中）,御井舎（右）

『江戸名所図会』に描かれた穴八幡宮

軒反り現寸図

布袋尊覆屋　小屋組　工事中写真

布袋尊覆屋　軸部の工事中写真

像は出現殿の中にあり、複製した像が設置されています）。御手洗舎の方は、日光の輪王寺大猷院の水屋の形を参考にし、脇柱を設け、屋根に軒唐破風を設けた形状としました。

手水のしつらえは、覆屋内の布袋尊と並んで今回新たにもう一体、布袋様の石像を製作し、福の神である布袋様の背負う大きな袋から手水を受ける形状としました。

装飾にも、それぞれにふさわしいモチーフを取り入れています。御手洗舎には古来より東洋では霊獣、水を司る龍神として崇められてる龍を、布袋尊覆屋には長寿を象徴し縁起の良いモチーフとされる鶴と亀を、建物の内外で阿・吽形の組み合わせとして取り入れています。

江戸期の壮麗な姿の実現に向け、伝統美の再現と長寿命化をテーマに境内の再建に取り組んでいます。今回完成した建物も、末永く人々に親しまれる建物となることを願っています。

参道から社殿に向かう

御手洗舎　布袋像（手水吐水）

FUKUOKA AIRPORT CARGO TERMINAL

KOHEI OGAWA／KAZUHIRO SAKAGUCHI

『ダブルスーパーウィング』明るく軽快な無柱大空間の実現

―スーパーウィングの進化から新たな可能性を創造する―

小川　浩平　意匠設計　2006年入社

坂口　和大　構造設計　2015年入社

FUKUOKA AIRPORT CARGO TERMINAL

福岡空港貨物施設移転整備事業

『ダブルスーパーウィング』で案件入手

本案件は、福岡空港現滑走路西側への新滑走路の増設計画の一環で、新たな貨物施設をつくるための設計施工入札コンペにて入手しました。

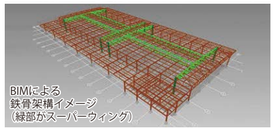
施主要望は、①無柱の大空間であること、②将来建屋の拡張が可能できること、そして当然③短工期・低予算、の3点でした。①と③には、当社固有の技術『スーパーウィング』で答える、という方針が初期段階で決まっていたのですが、②への解答は何度も議論を重ね、XY双方向にスーパーウィングとすることに決めました。

当社でも初のトライで難度の高い構造計画でしたが、妻側外壁を構造的にフリーにすることで将来拡張への対応を可能にするアイデアが高く評価され、見事入手することができました。

明るく軽快な大空間構造の実現

屋根の重量に加え、風の吹き下げを考慮すると、たわみは250㎜というNGの計算結果になりましたが、PC鋼線へのプレストレス力を導入することで、200㎜以内に抑えることに成功しました。また、トラス成の小さいすっきりとした架構とすることもできて、施主からはハイサイド窓から入る光にあふれた荷捌場に対し、「こんなに明るい荷捌場は初めて」と大好評でした。

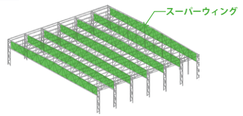
スーパーウィング建方状況



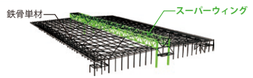
BIMによる鉄骨架構イメージ（緑部がスーパーウィング）

スーパーウィングのタイプ

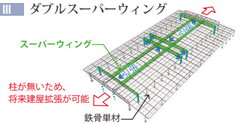
TYPE Ⅰ　一方向平行スーパーウィング



TYPE Ⅱ　キールスーパーウィング



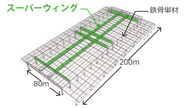
TYPE Ⅲ　ダブルスーパーウィング



スーパーウィングの主な特徴

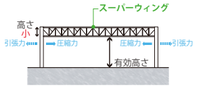
1. 無柱の大空間が可能

奥行80m×間口200mといった無柱の大空間が可能です。



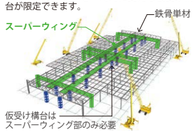
2. 鉄骨量を10%削減

トラス下弦材のPC鋼線を引っ張ることで生じる圧縮力により、トラスを押し上げてくれる効果を利用することで、一般的なトラス構造に比べ、トラス高さが小さいのが特徴です。



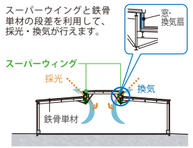
3. 工期を最大10%短縮

スーパーウイングを一時的に支える仮受け構台が限定できます。



4. 架構形状を使った採光・換気が可能

スーパーウイングと鉄骨単材の段差を利用して、採光・換気が行えます。



スーパーウィングの特徴と様々な建物用途への可能性

一般的な鉄骨トラス梁に比べて次のような特徴が挙げられます。

1. 無柱の大空間が可能
2. 鉄骨量を削減
3. 工期の短縮化
4. 架構形状を使った採光・換気が可能

これらの特徴をうまく使えば、工場・倉庫といった生産・流通系用途、ショッピングモール・劇場といった商業・文化系用途、スタジアム・アリーナといったスポーツ・レジャー系用途等、様々な用途の大空間を経済的で短工期に実現することが可能です。

スーパーウィングの経験の蓄積と3つのタイプに分類

スーパーウィングの第1作目を世に出してから29年が経ち、本案件で30作目となりました。これらは3つのタイプに分けることができ、空間要望にあわせ計画することが可能となりました。

ハイスピードで進化する現代社会において、建物への要望は多様化しています。スーパーウィングによる軽快で明るい無柱の大空間がそれらを大きく包み込む一つの解答として、今後も進化を続けていきたいと考えています。

三現主義と設計技術力で実現したものづくり

― 空港ターミナルの大改修 ―

角田　崇	意匠設計	1992年入社
山本　武	意匠設計	2005年入社
後藤　延明	構造設計	1993年入社
波江野　宏	設備設計	1988年入社
金沢　俊邦	電気設計	1981年入社
川口　学	電気設計	2004年入社

NEW CHITOSE AIRPORT DOMESTIC TERMINAL BUILDING RENEWAL PROJECT
新千歳空港国内線旅客ターミナルビル改修工事

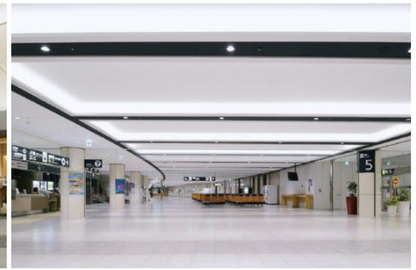
新千歳空港の国内線旅客ターミナルを3年5か月の期間でリニューアルしました。空港の主要機能を生かしながら、約5万㎡のレイアウトを順次変更する玉突き移転工事のため、最大17名の常駐設計室を設け、空港ビル発注の実施設計、各テナント工事の設計及び、全ての工事監理を行いました。

三現主義の実践

新築との違いは、ともすると不確かな情報を分析しながらの隠蔽された部分を含めた設計図の作成、解体後調査に基づく設計図の補完作業にあります。今回の改修工事では、昼夜様変わりしていく現場の状況をとらえ、設計として対応すべき事項を即断即決しなければならないことから、「三現主義」が極めて重要でした。設計チームによる現場巡回に努め、各技術者視点での意見を集約し、お客様や現場に提案を行いながら、関係者一同で決定すべき事の連続でした。

設計技術力で応える

改修工事で火気を一切使用しない当社の大方針「火なし工法」の実践では、鉄骨部材や建具などの納まりを場所ごとの解体状況に合わせ、一つ一つ決定することが設計者の役割でした。既存のイメージを一新するロビーの天井デザインには、当社が直近に特許取得した「リニアブレース工法」を新千歳向けにアレンジして活用しました。既存設備の盛替が必要となる天井下地用鉄骨工事を大幅に削減でき、改修工事において絶大なる効果を発揮しました。また、車両が忙しく出入りする手荷物荷捌場の設計では、空気環境シミュレーションにより天井を設けない事が可能となり、工期短縮を実現する等、設計技術力で空港改修のニーズに応えました。



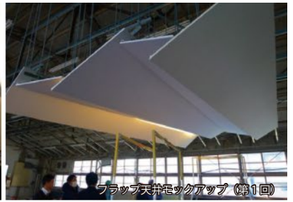
地盤の車両進行チェック

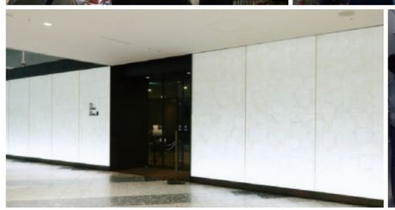
検収書類審査

日常点検

解体後現地調査

完成前検査


プラップ天井モックアップ（第1回）



光壁モックアップ

隈研吾建築都市設計事務所とのコラボレーション

数多くのテナント工事の中でANAラウンジは、もっとも記憶に残るプロジェクトとなりました。隈研吾建築都市設計事務所（以下隈事務所）がデザイン監修、当社が実施設計・監理を行ないました。

受付ホールとラウンジは、隈事務所より飛行機のフラップをイメージした形状の和紙貼天井が提案されました。階高・躯体・インフラ設備など既存の制約に対し、折り重なる複雑な天井パターンを納めるため、3Dモデルを活用して設計を行いました。形状・位置・勾配・テクスチャ確認用のモックアップを繰返し製作し、隈先生のイメージを具現化しました。各部のディテールについても手描きスケッチを何案も作成し、施工に展開しました。

和紙の光壁は、施主より汚れの保護の要望を受け、ガラスで挟み込むディテールとするため、出来栄えをモックアップで入念に検証しました。

また、全体を通じ、空間の印象を左右する照明計画は、狙い通りの雰囲気を実現するべく、試行錯誤の繰り返しでした。

当初の紙面上の図面やスケッチに固執することなく、現物・素材感・光の演出にこだわりぬく隈先生の姿勢に、設計チームは大いに共感をもち、一丸となって取り組むことができました。施主や利用者に大変満足していただいている声を今後の活力にしたいと思います。

TMG ASAKA MEDICAL CENTER

KAZUTO ENAMI ／ RYOICHI HATANO ／ KAZUYUKI KINOSHITA ／ MASATO SHINDO ／ KAHO MUKOYAMA

自然を活かし、「地域」に根差した「地域」の病院

―病院スタッフ・学生と協同したものづくり―

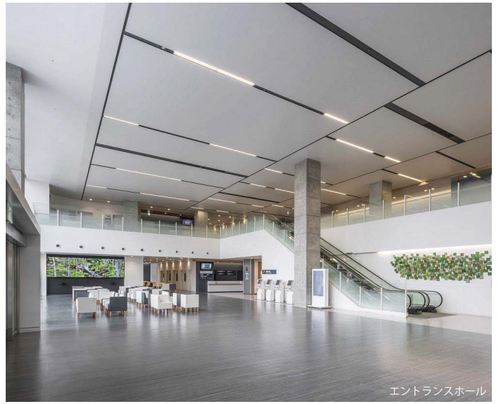
榎並	和人	意匠設計	1996年入社
端野	亮一	意匠設計	1999年入社
木下	和之	意匠設計	2012年入社
進藤	正人	意匠設計	2014年入社
向山	佳穂	意匠設計	2015年入社

TMG ASAKA MEDICAL CENTER
ＴＭＧあさか医療センター

本計画は、昭和52年の開設以来、埼玉県南西部の２次救急・高度専門医療の機能を担ってきた医療法人社団武蔵野会朝霞台中央総合病院の老朽化に伴う移転新築計画です。

人を包み込む環境をインテリアと捉え、病院の廻りにある豊な自然がインテリアとなることで医療環境を向上させることを心がけました。

模型・パースによる検討の様子



エントランスホール

病室を包む門形フレーム

機能的な外装計画

白い門形フレームで病室が包まれるような外観構成としています。妻側にはスリット状の開口を設け、廊下の先を必ずオープンエンドとすることで、外光を取り入れにくい病棟廊下に光が差し込み、視線が外の緑へと抜けるようにしています。

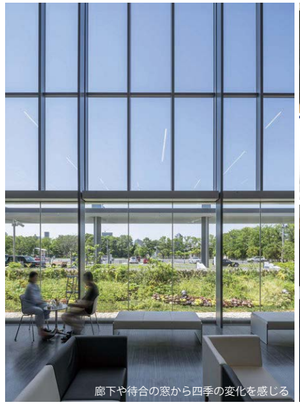
平側では柱型をふかして、庇を設けて病室への日射を低減しつつ、ふかした柱の裏側をＰＳに利用しています。ＰＳを外壁に配置することで内部空間に自由度を与えています。雨樋もデザインに組み込み、意匠・構造に加え、設備も一体化したファサードとなっています。病院では珍しい紺色の外装が、青空に溶け込み、白いフレームをより強調しています。

採光や排煙など法的な要求をクリアしながら、シンプルな構成にまとめることに苦労しました。

周辺環境を利用した内装計画

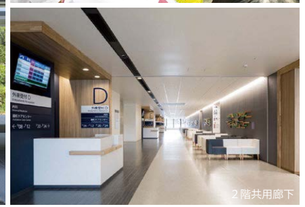
病院の計画は、施主である医者・看護師の要望と共に、患者側の要望を常に意識する必要があります。

施主・現場と設計が利用者・運営側の視点を共有し、一体となって案をブラッシュアップさせるために、病棟の「モックアップ」・「３Ｄモデル」・「内観パース」・「１：１００模型」をどれも細部まで作り込み、病院の全体像から内装のデザイン素材・質感に至るまで協議・検討を行いました。



廊下や待合の窓から四季の変化を感じる

アートの製作ワークショップの様子



２階共用廊下

内部の構成としては、視線が軸線状に抜けるシンプルな平面構成とすることで、周辺の豊かな自然環境を内部へ引き込み、患者に居心地の良さと、わかりやすい安心感を与えるプランとしています。

患者と病院関係者の接点となる各窓口には、外部の豊かな自然と同調する木調を多用し、柔らかな印象を持つアイストップとしました。

各階にある４病棟（入院患者のエリア）には病棟（グループ）ごとに周辺環境から抽出した色彩・サインを採用し、利用者が愛着を持ちやすい計画としています。

照明・スプリンクラー・空調などの天井レイアウトについても敷地に連立するケヤキの間隔など、周辺環境の要素を手掛かりに、シンプルな構成としてまとめています。

運営者（医師・看護士など）にとって機能的であると同時に、光や緑に包まれることで患者に安らぎと心地よさを与える空間づくりを目指し、検討を行いました。

四季が彩る病院

外構計画は、窓からの見え方を意識しました。季節ごと色とりどりの花が咲くように樹種を選定することで、室内からも四季の移り変わりを感じることが出来るように計画しました。

工事の際に伐採してしまう既存のケヤキを再利用し、病院スタッフや近隣の大学とコラボした院内アートを作成しました。ケヤキを切り出した木材を病院スタッフの皆様の協力で色付けし、エントランスホールや待合スペースに飾りました。

3か月間の現場研修

私（向山）の入社3年目の現場研修では、設計者としてではなく現場監督として、この現場に携わりました。コンクリートの打設では、木槌で型枠をトントンと叩く作業を職人さんと一緒に行いました。建物は一人一人の職人さんの手作業の積み重ねで出来ているという、当たり前ですが今まで気が付けなかったことを学べました。

学生のコミュニケーションを育む校舎

―学ぶ・語らう・出会う　場づくり―

加地　則之　意匠設計　1990年入社
日野　哲也　意匠設計　2012年入社

TOKYO SEITOKU UNIVERSITY
BUILDING NO.6 GLOBAL CENTER
東京成徳大学 6号館
グローバルセンター

新設される国際学部の為の新校舎。施主の要望は既存建物群と調和しながらも、特徴的な外観を持った建物とする事でした。また、毎回の定例では学生が勉強に臨みやすい空間・学生のコミュニケーションを生みやすい空間をどのように創れるかというテーマが取り上げられ、外装・内装のテーマを融合させ新しいものを生み出すのが命題となりました。

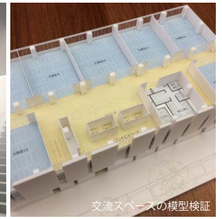
外装・内装一体のつくり込み

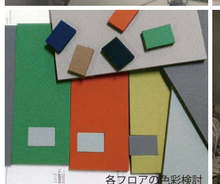
初期の提案では横連窓とスラブラインを強調したデザインを採用していましたが、より特徴のあるファサードとするため、デザインの見直しを行いました。ファサードデザインの自由度を高めるために、コアを外壁から独立させ、縦長のカーテンウォールをランダムに配置したデザインとしました。エレベーターシャフトを2台ずつ離して配置し、エレベーターホール側のオープンスペースと小路で繋がったホール裏のコミュニケーションスペースを生み出しました。初期提案からの大幅な変更のため、各階切り離し可能な模型をつくり、ファサードとプランの関係性や学生の居場所と使われ方を視覚で伝える事で、方針を決めていきました。

学生のための施設づくり

打合せによく出てきたキーワード「学生のために・・・」。学園の思いに応えるために様々なテーマについて打合せをしました。学生の居場所は使われ方を想定し、様々なアクティビティに対応出来る場所を設けました。外国人教師が常駐する場所は建物メインとなる場所に設置し、間仕切り壁を無くし、ボーダレスとする事で接しやすい空間としました。また、メイン動線であるエレベーターホールを広くする事でコミュニケーションが生まれやすい空間とし、一方でエレベーター裏のスペースは

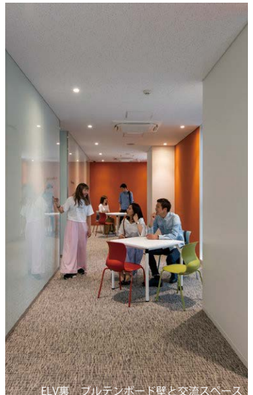
サイン位置の検討


交流スペースの模型検証


各フロアの色彩検討

施主打合せでの照明確認

外装ディテール


ELV裏　プルデンボード壁と交流スペース

研究室フロア　学生・教員の交流スペース

ブレインストーミング　ウォール(ガラス壁)

ゼミ室　壁一面のホワイトボード

少人数での打合せ・討論の場として設定しました。研究室フロアには、教員と生徒が交流しやすくする場としてカウンター廻りにゼミ、小講義ができるオープンスペースを設けました。各階にあるホワイトボード代わりになるガラス壁やピンナップも出来るプルデンボード壁も、学生が自然と集まって来るように考えたアイデアです。サインや色彩計画、照明を含め、施主とひとつひとつモックアップを確認し、一体となって創りあげていきました。

外装デザインの取り組み

外装のデザインの技術的テーマとして、メインファサードから「構造スリットを無くす」という事を考えました。縦長のカーテンウォール窓は構造スリットを無くすのに適していると考えていましたが、水平スリットをどのように処理するかが課題でした。設計段階から、現場担当者に打合せに参加してもらい、構造躯体の打ち方や型枠の組み方などの施工方法も含めた打合せをする事で、構造スリットや打継ぎ目地を最小限としたシンプルなファサード設計が出来ました。非常に難しいコンクリートの打ち方に挑戦したこのファサードは、設計・現業の協力が生み出した成果だと思っています。

複雑な構成をシンプルにつくる

―妹島事務所との共同設計を通して―

根岸　健一　意匠設計　2000年入社
一万田　知宏　意匠設計　2014年入社
西川　航太　構造設計　2009年入社
木内　佑輔　構造設計　2014年入社

Japan Woman's University | Library
日本女子大学目白キャンパス将来構想
図書館棟

日本女子大学目白キャンパスの大規模再整備計画です。プロジェクトは2期に分かれ、Ⅰ期工事では図書館棟・体育館の建替、Ⅱ期工事では、教室研究室棟・食堂棟の新設、各所改修、外構工事を行い、2021年に完成を迎える予定です。設計は、基本設計までを妹島和世建築設計事務所が行い、実施設計・工事監理を当社と妹島事務所との設計ＪＶで行なっています。初めての妹島事務所との共同設計の中で、多くの刺激を受けながら進めているプロジェクトです。今回はⅠ期工事の図書館棟について紹介をします。

計画概要

地下1階・地上4階、鉄骨造の建物は、6600グリッドに配置されたφ267・4の鋼管柱とRCフラットスラブにより構成されており、建物の外周部をめぐる螺旋状のスロープが各階の床をゆるやかにつなげています。コアを中心に配置したブレースで水平力を負担することで、柱径を最小化しています。

床を二重床として空調や配管をすべて床下に収めることで、全面RC打ち放しの天井を実現しています。外壁はすべてCWであり、積層するコンクリートスラブと鉄の柱からなる構造形式がそのまま内外に表れる計画です。

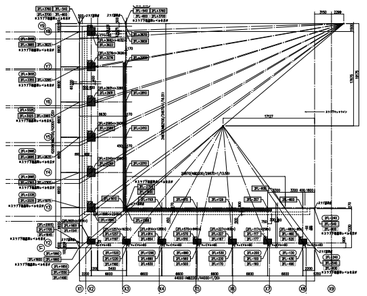
中央のフラットな床には約80万冊の蔵書を効率的に集約し、外周部にはスロープによって生まれる天井の高い開放的な閲覧スペースや、キャンパスを見渡す広々としたテラスなど、学生が気持ちよく過ごすことのできる居場所をつくっています。

生まれ変わるキャンパスのシンボルにふさわしいこの設計を、いかにシンプルに美しく実現できるか、ということが私たちの課題でした。

構造をデザインする

躯体がほとんどそのまま仕上となる今回の計画では、意匠と構造の強い連携が不可欠です。

中でも、スロープスラブの設計は1つの大きなポイントとなります。螺旋状にめぐるスロープは模型でみると単純に見えますが、実際には3次曲面で、ねじれた形をしています。そのねじれたスラブの上に柱頭のキャピタルや逆梁が出てくるのですが、スラブを極限まで薄く見せるために、限られた二重床のふところの中で全てを納める必要がありました。このため設計段階から、意匠・構造が一緒に、模型やBIMで納まりの確認を入念に行いながら、躯体設計を行っています。ブレースや外装下地等もすべて空間に表れるため、その形状をいかにシンプルに見せられるか、デザインと構造上の要求をすり合わせながら幾度とない調整を行いました。



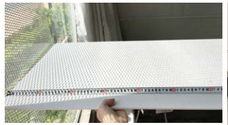
スロープレベル設計図

模型から始まる設計

妹島事務所との共同設計の中で驚くのが、そのスタディ模型の圧倒的な数です。敷地模型からディテール模型、モックアップまで、様々なスケールを横断しながら模型をつくり、一緒に確認を行っています。

今回のような複雑な建物でも、模型があれば一瞬でその場にいる全員が方向性を共有できます。まず模型で純粋に見せたいかたちをつくり、それを実現するためにどうするべきか、意匠・構造・設備設計と現場、全員で検討を重ねているところです。

設計事務所との共同は、私たちの従来通りの設計手法を見つめなおし、新しい発想を得る、とても貴重な経験となっています。ここでの経験を忘れることなく、今後の案件にも生かしていきたいと思っています。

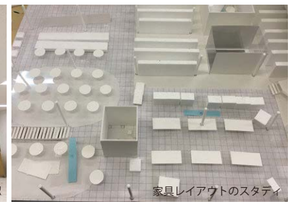


回よけスクリーンのモックアップ検討

露出ダクト・配管の配置スタディ

照明BOXの1/1模型による確認

階段形状のスタディ



家具レイアウトのスタディ

SHINGO GOTO ／ RYOTA KONO ／ ATSUHIKO SUZUKI ／ MAKOTO FURUKUBO

広島に新しいシンボルを創る

―「メディアファクトリー」を具現化する外装デザイン―

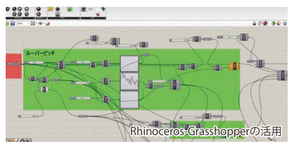
後藤　真吾	意匠設計	1993年入社
河野　亮太	意匠設計	2012年入社
鈴木　淳彦	設備設計	1997年入社
古久保　真	電気設計	1989年入社

TSS New Headquarters
テレビ新広島新社屋

エントランス

キーワード	二進数	寸法に転換	
TSS	1000110101010000010001100110 1010011001000011010100011	0or1	＝100mm
Televosion	1000101010001100010010101011 0011010000100101010100011	00or11	＝150mm
		000or111	＝200mm
Shinhiroshima	1111110011011100110010010 0101101010001010110011 1	0000…or1111…	＝300mm

外装デザイン手法の概念



Rhinoceros Grasshopperの活用

『新たなシンボル』の創出

施主の「一目見てTV局とわかるような、『あそこにあるよね』とわかるような外観がほしい」というご要望から、広島の新しいシンボルを創るという思いで設計に取り組んでいます。

外装のデザインは「テレビ局はメディアファクトリー」との施主の言葉をコンセプトに構想していきました。

メディアファクトリー

「メディア」は直訳すると媒体ですが、テレビが扱う情報は、デジタル化されて映像や音声に変換され、質量を持ちません。そこから移りゆく情報をきめ細かに映し出す、重さを持たない、映像のファサードを思い浮かべました。

また「ファクトリー」という言葉からは金属や大空間がイメージされ、周辺の景色を映しこむ金属のルーバーで建物を覆うことでキーワードを具現化していきました。

外観をデジタル情報化する

「建築もテレビのように、デジタル情報を介した表現はできないか。」この問に対し、言葉（情報）を二進数（デジタル）に置き換え、プログラミング制御によってルーバーのピッチを決定するというアイデアを思いつきました。

TSS（テレビ新広島）に関連のあるキーワードを、テレビで実際に使われているコードで16進数に変換し、さらに2進数へと変換することで情報を分解していきました。

ファサードへの転換はRhinoceros-Grasshopperというソフトで単純な01配列を寸法に置き換えるプログラムを作成して行いました。

建物のビジュアルのみならず、成り立ちまでデジタル化とすることで、コンセプトを徹底的に追求しました。

JUN NAITO ／ YOSHIYUKI HIRANO ／ TAKAMASA KASHIMA ／ MASATO NARITA

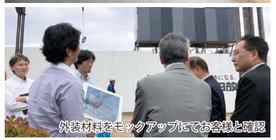
『日本一コンパクトなラジオ・テレビ兼営局』

―お客様と作り上げる秋田駅の新たな顔―

内藤　純	意匠設計	2007年入社
平野　義之	意匠設計	2008年入社
鹿島　孝政	構造設計	2012年入社
成田　政壮	設備設計	2015年入社

Akita Broadcasting System Inc.
秋田放送新社屋

秋田杉を使ったエントランス



外装材料をモックアップにてお客様と確認

ABS：幸坂アナウンサー　設計：内藤
アナウンサーの立場になってスタジオ機能の確認

秋田放送はABSの愛称で呼ばれ、秋田県民に長年愛されている県内最初の民間放送局です。既存社屋の老朽化に伴い、秋田駅前への移転計画が進められました。

『日本一コンパクトなラジオ・テレビ兼営局』というコンセプトが掲げられ、社員へのヒアリングを実施しながら、既存社屋の約7割のスペースまで効率化して計画をまとめました。

秋田駅の新たな顔づくり

外装計画は、オープンな駅前広場に対し、放送機能として騒音・日射等の外部の影響をできる限り抑えた計画としたいという思いを解決することがポイントとなりました。

お客様やコンサル会社と議論を重ね、3層構成の外観としました。1階は秋田杉を用いたエントランス・多目的ホールを駅前広場に開き、2階は放送機能を集約し、壁面を中心にラジオスタジオが垣間見えるような閉じた構成。3階は大きなガラス面を用い、人の動きが見える構成としています。それぞれの層と屋上に配置した鉄塔が、秋田駅前に新たな表情を作ることを目指しました。

放送局を設計するにあたって

放送局は、24時間365日稼働し、災害時には的確な情報を素早く聴取者・視聴者に伝えることが使命です。そのための設備機器等の配慮はもちろんですが、局員の機動性を確保するため、階段室の位置や構成にも配慮しています。

番組はアナウンサー・カメラマン・制作・編集など様々な方が関わることで出来上がります。放送局という特殊な用途の設計をするにあたり、それぞれの方の立場になって考えることを心がけ、お客様が利用しやすい建物になるよう、創り込みをしていきたいと考えています。

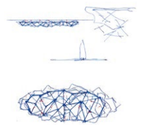
建築と人をつなぐもの

―中間スケールのファニチャーアート―

MAKOTO FUJII ／ NATSUKO YAMADA

Collaboration

Mock up


Polygon Sketch

FUKURACIA Marunouchi OAZO
カンファレンススタジオフクラシア丸の内オアゾ
HOTEL FUKURACIA HARUMI
ホテルフクラシア晴海

カンファレンスギャラリー

フクラシア丸の内オアゾは、エグゼクティブをターゲットとした貸会議室です。カンファレンススタジオ・フクラシアシリーズは7年前に品川からデザインを受けて以来、現在では都内に6店舗を展開するまでに成長しています。また今回は同施主が経営している研修特化型ホテルも名称を変え、ホテルフクラシア晴海としフクラシアブランドの強化に伴うリニューアル工事を行いました。

「カンファレンスギャラリー」というコンセプトを掲げ、新しい価値創造の場として、役員室やラグジュアリーホテルとは異なる会議室ならでは空間を実現させるため、リフレッシュと共に「エネルギーを得る」ことのできる空間を目指しました。

人が集まる、そこに

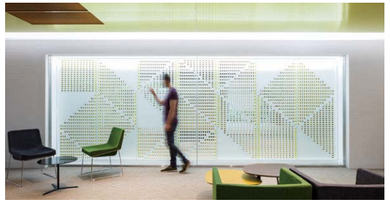
今回の案件でコラボレーションをした清水建設　東京木工場は、明治17年の開設以来、およそ130年にわたり木工技術を伝承し続け、同時に時代が要求する様々な需要に応えるために常に技術革新を続けてきた職人集団です。

フクラシア案件では全案件でコラボレートしており、デザインクオリティーを保つ重要なファクターとなります。今回、プロジェクトの顔となるフクラシア丸の内オアゾ、フクラシア晴海でのエントランスカウンター、ライトウォールを制作しました。

カウンターは、それ自体を空間の中に浮かぶ彫刻として捉え、プログラミングによるNC加工と、腰部分に伝統的な表面加工の“浮造り”を行い、テクノロジーと職人の手仕事を合わせることで、心地良さを感じ自然と引き寄せられる有機的で柔らかな存在としてお客様を迎えます。

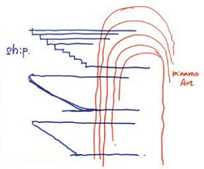
単なる受付ではなく、スタッフと使われるお客様が共存し、お互いの働く場となることを考えました。

HOTEL FUKURACIA HARUMI



Minamo Art

Concept Sketch



制作の中で

晴海で制作したライトウォールは、OSBボードにNCルーターで穴あけ加工をし二重にすることで、シークエンスによる光の見え隠れによって表情変化させます。いくつものモックアップをつくり、バランスを検討しながら試行錯誤を繰り返しました。

また、木材をNCルーターで切り抜く際に土台として使用する合板に抜き跡が残ります。何枚もの軌跡が重なった、製作の過程が刻まれた板を、アートとして、カウンター背面に設置することで、カウンターと一体となったストーリーを持たせました。

同施主であるフクラシアシリーズでは、年々要求も高まり、新しさとオリジナリティーが求められています。そのハードルを越えるためのコラボレーションが重要だと感じています。

FUKURACIA MARUNOUCHI OAZO

DESIGN AWARD 2018

ASIA DESIGN PRIZE 2018 WINNER

SENNOSUKE HONTEN PROJECT

JUN SUZUKI ／ KENTA FUJISHIMA ／ YASUO HONMA ／ MASASHI KODA

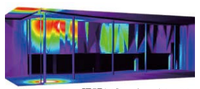
多くの子どもたちを魚好きに

―地域に開いたガラスファサードとお客様を迎え入れる大屋根―

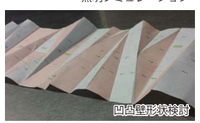
鈴木　淳	意匠設計	2005年入社
藤嶋　健太	意匠設計	2009年入社
本間　康雄	意匠設計	1995年入社
江田　正志	意匠設計	2010年入社

SENNOSUKE HONTEN PROJECT
釧之助本店

社内コンペで多数の案を検討



照明シミュレーション



凹凸壁形状検討

施主は水産業者であり、魚離れしている子どもたちにもっと魚を好きになってもらいたいとの想いから計画されました。本建物は、水産加工品を売る店舗、屋内バーベキュー施設、海鮮丼などの魚介定食を提供するレストラン、様々な場所の魚を観賞できる多数の個水槽をもつ水族館で構成されています。

社内コンペにて多数の屋根デザインを検討

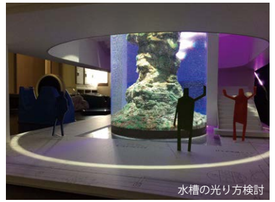
施主の要望はシンボリックな大屋根をかけること、大きなシリンダー水槽を入れること」でした。プログラムの自由度が高く、建物の可能性を広げるため、案件スタート時に社内コンペを開催しました。若手を中心に考えた多数のデザインをすべて施主に提示し、協議を重ね現在の屋根形状とガラスファサードのデザインに決定しました。屋根形状は多くのスタディー模型により検討し、コストや施工性にも配慮した結果、現在の形にたどりつきました。

イベントスペース吹抜の凹凸壁

ガラスファサードから見えるイベントスペース吹抜の壁は、魚を扱う施設として海の波や魚のうろこをイメージさせる、凹凸のあるデザインとしています。

建物の夕景を印象付ける照明については、ライティングデザイナーとともに3D検討やモックアップを作成し、実際の見え方を徹底的に検証しました。結果、世界的にも夕日の有名な釧路ですが、その夕日に負けないシンボリックな外観とすることができました。

エントランス水槽



水槽の光り方検討

水槽施工状況

メイン水槽の見せ方

本施設の目玉でもあるメイン水槽の大きさは直径4m、高さ8mのシリンダー形状で、アクリルの厚さは120㎜になります。配管を隠すための擬岩のデザインやメンテナンス可能な形状のスタディ、背面からLED照明をあてたときの見え方など、施主と議論を交わし見栄えと使いやすさを両立させるデザインのつくり込みを行いました。多種多様な水族館の見学や実際の飼育員へのヒアリングを通じ、使いやすさや見た目だけではなく展示生物を健康に保つ濾過機械等の重要性についても認識を新たにしました。

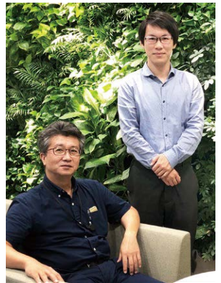
水槽廻りを吹抜とし階段を設置することで、いろんな高さ、場所から立体的に鑑賞することができます。高さの違いによる魚の生息域の差を見ることができるため、見学者に大変好評だと聞いています。

この施設を訪れた子どもたちが一人でも多く魚好きになり、釧路の新しいランドマークとして末永く来場者でにぎわうことを祈っています。

kewpie office building / Nantong, China
HIROSHI ITO / CHEN DANLI

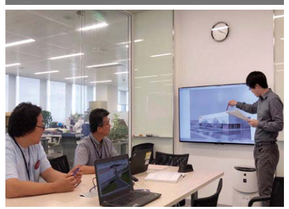
『コーポレートブランド』を発信するオフィス

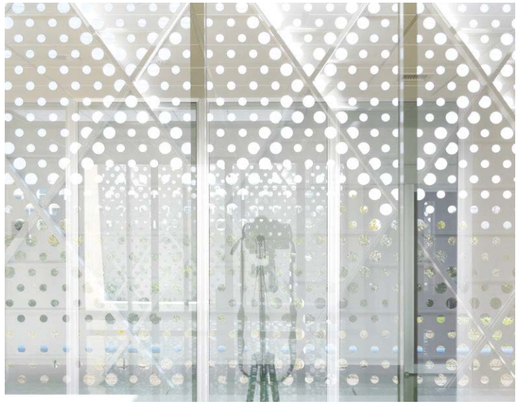
―お客様と設計者の想いを乗せたファサード―



伊藤　浩　意匠設計　2005年入社
Chen　Danli　意匠設計　2014年入社

kewpie office building
/ Nantong, China
南通キユーピー　事務棟





みんなの記憶に残る ファサードデザイン

お客様の商品と共にみんなの記憶に残る建築であり続けたい。

本案件はお客様が中国で3番目の生産拠点として建設した工場です。設計施工入札コンペで、当社の提案、デザインが評価され受注した案件です。

中国でも愛されている商品イメージをモチーフに、子供から大人まで、みんなの記憶に残る「わかりやすく」「ユニーク」なファサードデザインの実現を目指し、設計をしました。

こだわり抜いたモデル検討

製品をモチーフにしたパンチングメタルによって、ダブルスキンのファサードを構成しました。パンチングの配列によって浮き出るテクスチャーを如何にバランスよく、明瞭に見せるかは、本案件最大の見せ場であり、設計者として最も力を入れたポイントの1つでもあります。

モデリングの際、パネルの寸法系、太陽光のあたり方は当然ながらパネルの支持材、留め具、メンテナンスルートに至るまで、厚み、テクスチャーや反射率を含めモデルに詳細にインプットし、見え方をシミュレーションしました。

パンチングの径、パネル間のギャップ、塗装の色等はサプライヤーと議論しながら何度もモデルを調整し、現在の形にたどり着きました。

時間の表象

外壁を覆う白のパンチングパネルは足元のガラスに映りこむ自然光や風景が、時折々、季節折々の表情を作りだします。パネル越しに注ぎこむ、やさしい光と影は、外部空間と内部空間の触媒となり、時の表象として記憶に残り続けます。

中国でのものづくり

中国の建設技術は日進月歩であり、品質も向上しているとはいえ、イメージ通りのアルミパンチングパネルの製作施工ができるかが本案件のチャレンジでした。

製作工場へ幾度となく足を運び、現地製作者と共に、図面検討、曲面加工の精度確認を行い、設計者として納得いくまで関わった上で、製作しました。

白いパンチングパネルの清潔感をいつまでも保つために、表面には光触媒コーティングを施しました。日本から材料を取り寄せ、暴露試験を行い効果を確認しました。

紆余曲折を経ながらも、設計者・製作者・お客様が一丸となって作り上げたオフィス。最後にはお客様にご満足いただける仕上がりとなりました。

ブランドイメージを発信するデザイン

―北の大地から、世界に飛躍する企業の新製造拠点―

大澤　博行	意匠設計	1988年入社
若杉　典央	意匠設計	1998年入社
福西　泰博	意匠設計	2012年入社
森本　一寿美	意匠設計	2013年入社

ISHIYA SEIKA
KITAHIROSHIMA FACTORY
石屋製菓株式会社北広島工場

メイン道路側の外観

『新製造拠点』の実現

「白い恋人」・「美冬」といった北海道を代表するブランドを発信する石屋製菓様の新たな製造拠点。２０２０年東京オリンピックを控え、旺盛なインバウンド需要に対応するべく高い生産能力を備えた世界ブランドへの飛躍の場として計画しました。

ブランドイメージの発信

外観は断熱サンドイッチパネルによる断熱性能の確保、食品工場に求められる清潔感、最新鋭工場としての先進性の表現に加え、ＪＲ千歳線に面する工場棟西面は「白い恋人」・「美冬」の商品ロゴを掲げ、千歳空港からの旅行者や地域住民へのブランドイメージの発信に寄与する様デザインしました。北・東側の接道部には植栽を配置し、近隣住宅地への親和性に配慮し、外部階段は有孔折板のスクリーンを設け、圧迫感を低減しながら建物に柔らかな印象とリズム感を与えました。

ＪＲ側の外観

「白い恋人」をモチーフにした見学者ホール

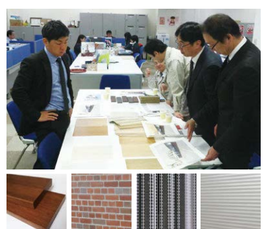
赤レンガ木ルーバーのエントランス

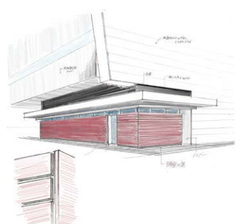
コーポレートサイン

北海道らしさと共に附属棟にパッケージデザインの表現を取り込む

素材と向き合う

石屋製菓様が海外各所から収集された赤レンガを門に使用したり、エントランス外周には本物の木によるルーバーの設置など、素材の特性を現場の方々と確認しながら、北海道の雪景色に映える建物づくりを心掛け、石屋製菓様のご満足を頂きました。

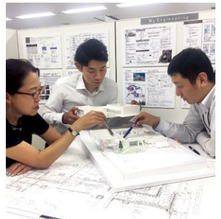




木ルーバーの色味やピッチ、レンガの割付をスケッチ、ＣＧで検証を行い、最後は現地のモックアップでお客様に確認を頂いて決定していきました。納まり含めて、きめ細かな作業の繰返しが今の姿をうみ出しています。

『子どもたちがいきいきと育つ空間』をかたちに

―施主と一緒に魅力ある空間を模索―



伊藤	和陽	意匠設計	2007年入社
浅田	正子	構造設計	2008年入社
鈴山	洋平	設備設計	2015年入社
中村	雅樹	電気設計	2007年入社
大西	宏明	意匠設計	1993年入社

HAKATA DAIICHI
KINDERGARTEN
博多第一幼稚園

本案件は、客先の老朽化した7つの幼稚園建替え工事の第一段階です。今後の「モデル園」となるよう、これまでの幼稚園にはない様々な仕掛けを取入れたいという施主の強い意向を受けスタートしたプロジェクトです。

回遊できる学び場

計画地は閑静な住宅街にあり、敷地も決して広いとは言えません。限られた敷地の中で既存の幼稚園を運営しながら、園庭の限られたスペースに新築する必要がありました。新しい幼稚園としての魅力を形にするため、施主と一緒に議論を何度も行いながら進めました。

敷地を有効利用するため園庭いっぱいまで建物を建設し、2階に中庭を配置しました。この中庭を階段や滑り台で新しい園庭とつなぐことで、園児たちがぐるぐる回遊しながら楽しく学び、一元気に遊べる広い空間が生まれました。

本園の特色の一つは異年齢教育にあります。異なる年齢の園児が一つのクラスで学び、刺激しあうことで、規律や協調性を鍛えることを目的としています。通常の同学年教育も行い、また放課後には学童保育やサッカースクール、地域交流など様々な取組みをするため、みんなの集まれる核となる場所が必要でした。

その中心となる場を多目的ホールと設定し、建物の中央、1階の玄関の正面に計画しました。上部の2階は中庭を設け、園児室を中庭を囲むように配置することで、園児同士が互いの動きが分かるようにしました。

オープンなトイレ

2階中庭

見える階段

園児室の界壁

玄関ホール

見える仮囲い

開放的な園児室

園児たちとモダ

絵本コーナー

死角をつくらない

園児同士の視線や気配を伝えることから生まれる刺激を大切にしたい。子供たちの生き生きとした活動を期待するとともに、先生や保護者、地域の方たちの目が届く安全・安心も実現する必要があります。

オープンな開口部分を出来るだけ確保するため、子どもの目線と大人の目線の双方からスタディーをしました。廊下と園児室の界壁、園児室間の界壁などはできるだけ大きな開口を採用しましたが、園児の目線の高さにあわせてグラデーションフィルムを採用しています。大人である先生の目線はどこでも視線が通りますが、園児には適度に囲まれた落ち着いた空間となるよう配慮した結果です。

また、階段部分も内外から園児の動きが見える工夫をしたり、職員室から園庭全体が見渡せるロングワイドな開口部（腰窓）を設置したり、どこでも視線が通る計画としました。一方で、園児たちが落ち着いて過ごせる洞窟のような絵本コーナーも設け、多様な居場所をつくっています。

園児、先生とのコラボ

幼稚園を運用しながらの工事であるため、ご迷惑をお掛けするのではと懸念していましたが、逆に施主から「工事を間近で体験できる貴重でラッキーな出来事だと捉えたい」と前向きなお話を頂きました。そこでまず、工事中も中の様子が見えるよう、仮囲いの一部を透明にしました。さらに園児たちが工事の雰囲気を体験出来るよう、園児だけの地鎮祭を行い工事の安全を祈願したり、上棟式には餅まきも行いました。私たちも七夕など園のイベントに参加し、お礼に勤労感謝の日に、お手紙と力レンダーを頂いたりしました。他にも、解体前の既存園舎に落書き大会を行うなど様々な行事により、コミュニケーションよくお引渡しができたと思います。

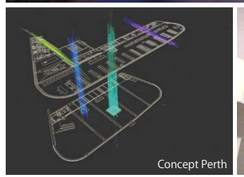
空間は背景である事、体験はアイコニックである事

―シンガポールでのショールームデザインを通して―

W.ATELIER SHOWROOM
W.atelier ショールーム

3F サニタリーショールーム

外観


Concept Perth

モデル検討

現地での現場打合せ

海外ローカル企業からの初めての依頼

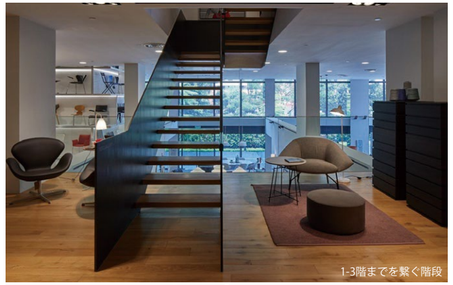
シンガポール中心部からほど近い、家具とサニタリーを扱うサプライヤーのショールームです。フィールドフォー・デザインオフィス設立以降初めて海外ローカル企業からの企画・基本デザインを２０１４年に依頼されました。新たなショールームが入る建築本体はシンガポールのローカルアーキテクトの設計ということもあり、東南アジアらしいユニークな外観を持っています。その中の一角で、各フロアがメゾネット構成となった1階と3階部分にこのショールームは位置しています。オーナーからの依頼は、「お客様にいくの商品展示をしたい」、「お客様にインパクトを与えたい」、「1階と3階で売る商品を明確に分ける」という事でした。

モノクローム・マテリアル

ショールームの主役はあくまでも商品です。商品を鮮やかに浮かび上がらせるために、コーポレートカラーの色や商品以外の色味、華美な装飾は極力排し、モノクロームの空間の中で自身の生活シーンと家具とがイメージしやすいようにマテリアルを選定しました。それは、「退屈な素っ気なさ」を空間に与えるのではなく、近づいた際に感じ取ることができる質感を持ち、そこはかとなく立ち現れる「豊かなニュートラルさ」という表現に近いのかもしれません。

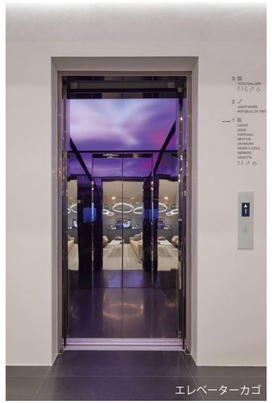
アイコニック・スケープ

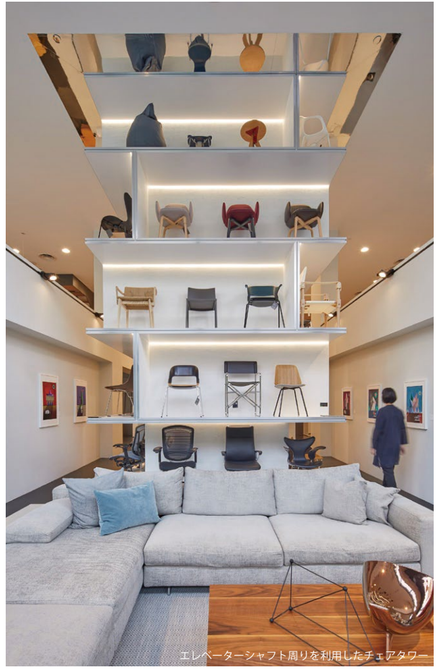
前述したように、主役は商品であり空間はそれをサポートするものでなければなりません。しかし、その空間そのものが体験として、また記憶としてお客様にとって特別なものとして残らないことにはまた来てもらえないため、商品と共に強いインプレッション（＝SNS映え）を持ち帰ってもらう必要があると考えました。そこで、1階～3階と上下に分断されたショールームスペースをつなぐ移動空間（ショールーム中心にあるエレベーターシャフトの周囲、エレベータのカゴ、1～3階までをつなぐ階段、トイレ前の通路など）にインパクトを与える仕掛けを組み込み、次の空間を期待させながら知らず知らずのうちに階段をまたいで回遊し、多くの商品になるべく触れる時間が長くなるようなことを目指しデザインしました。


1-3階までを繋ぐ階段

ショーキッチン

トイレ前通路


エレベーターカゴ


エレベーターシャフト周りを利用したチェアタワー

ノイズ・レス

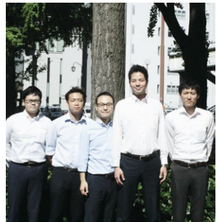
精緻にデザインされた世界のマスターピースであるプロダクトに対して、なるべくお客様が集中できるように商品と似たスケールのエレメントを共存させることを意識的に避けました。例えば扉においては、ハンドルやヒンジなど商品と混同しそうな同スケールのものが決して見えてこないように扉面材そのものに機能を組み込むようなデザインとしました。また、ディテールにおいても国内におけるそれよりも、さらに極限までそぎ落とすことで徹底的にノイズを無くすことを目指し、見せなければならないものと、見せる必要がないものとを明確に意識しました。

YAMADAYA PROJECT

YU OHATA ／ NAOKI KATO ／ SHUSEI INABA ／ YUSUKE MIZUI ／ KOTA SAKAI

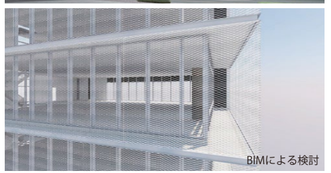
『まとう建築』

ーアパレル業と建築の融合ー



大旗　祐	意匠設計	2010年入社
加藤　直樹	意匠設計	2013年入社
稲葉　秀星	構造設計	2009年入社
水井　勇介	設備設計	2011年入社
酒井　浩太	電気設計	2015年入社

YAMADAYA PROJECT
ヤマダヤ本社建替計画



BIMによる検討

エントランスホール

10F 研修ホール

やさしい建築を目指して

名古屋城の天守閣を臨む敷地に、女性アパレル業の本社ビルのオフィス機能と全国の小売店舗に商品を展開するための倉庫を複合させています。

「やさしさを感じられる建築を実現したい」という施主の言葉を基に様々な外装検討を行いました。衣装を着るように、アルミエキスパンドメタルを柔らかくまとい、透明で軽やかな外装を目指しました。日射を遮蔽しながら風を取り込み、光と風を適切にコントロールした快適な執務空間を計画しています。

建物の低層部とエントランスホールには、杉板本実型枠のRC打放壁を計画しています。施主と様々な事例を見学するとともに、原寸モックアップを作成する等、施工者とどのように実現していくか、日々検討を続けています。

ものづくりの楽しさ

今回の案件を通して、施主と設計者、施工者、それぞれが一体となって建物の実現に向けて協力し、様々な困難を乗り越えていく「ものづくり」の充実感と楽しさを感じています。

いきいきとした建築を実現できるように取り組んでいきます。

KANSAI KEW-PORT PROJECT

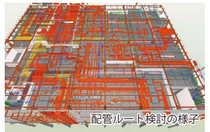
TADAHIKO KOTSUBO ／ TAKASHI YOSHIMURA ／ ASAHI BABA

『都市型高層食品工場』の実現

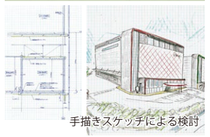
ー関西から毎日の食卓を豊かにするためにー

小坪　忠彦	意匠設計	1982年入社
吉村　天	意匠設計	1993年入社
馬場　あさひ	意匠設計	2014年入社

KANSAI KEW-PORT PROJECT
関西キューポート新築工事



配管ルート検討の様子



手描きスケッチによる検討

設計チーム
(辻村・馬場・小坪・島村・石飛・鳥居・堤)

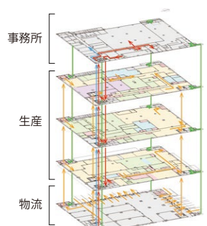
設計施工コンペに勝利

本案件は、「キユーピーグループの西日本における商品開発及び生産のための新たな拠点」の創出として、設計施工コンペを勝ち抜き受注しました。

衛生区分による明確な動線計画、従業員の働く環境・アメニティの向上、シナジー空間、徹底した結露対策等の提案が高く評価され受注につながりました。

明快な立体動線

食品工場において大切な清潔・準清潔区域等の衛生区分や更衣・更靴システム等、動線がクロスしないよう立体的検討を行い、管理しやすく機能的なゾーニング計画としています。1～4階に工場、5階に執務機能を集約することで従業員の動線短縮を図り、利便性を向上させています。



3Dで情報共有

設備配管・ダクトや電気ラックだけでなく、生産機器の配管類が複雑に交錯する施設のため、3Dでの情報共有を行っています。設計段階から現場・サブコンを交えて画面上での検討会を行い、干渉チェックや最適な配管ルート、取合いの確認をしています。

クライアントとのコミュニケーションツールとしても3Dを使用し、建築情報を決定する上では、3D（画面）と、2D（アナログ）の資料の両方を使い、お互いに勘違いや思い違いのないよう打合せを進めています。

TENSHI COLLEGE CAMPUS MASTER PLAN

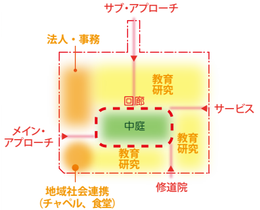
HIROAKI ONISHI ／ SHINJI MATSUMOTO

マスタープランが「想い」をつなぐ

―30年後とその先のキャンパス像を描いた上で「今」を考える―

大西　宏明　意匠設計　1993年入社
松本　慎司　意匠設計　1996年入社

TENSHI COLLEGE CAMPUS MASTER PLAN
天使大学キャンパスマスタープラン



学園のルーツ：アッシジの聖フランチェスコ教会

「はじめの一手」が将来を決める

大学キャンパスには新旧の建物が、機能もデザインも様々なかたちで存在します。学生や社会に対して、時代の変化に即した教育研究環境を提供するためには、キャンパスが計画的に新陳代謝を繰り返す必要があります。新校舎の計画が直面する課題の解決だけではなく、将来にわたる段階的なキャンパス整備を左右する重要な「はじめの一手」であることを強く認識し、キャンパスの未来を方向づける、マスタープランの策定に努めました。

「守るべきもの」を考える

天使大学はローマ・カトリック修道会をルーツに持つ大学です。その「ルーツを辿る旅」として学園関係者とフランス・イタリアを巡り、学園が捉えるカトリック精神や現在に至る歴史を肌で感じながら学園の「守るべきもの」「天使らしさ」を深く考える機会を得ました。

建学の精神「愛をとおして真理へ」のもと、キャンパス内の日常において「カトリックらしさ」を様々な場所や気配で感じることができる環境を整え「想い」を受け継ぐことができるよう努めます。

いつも「最適解」

段階的かつ持続的な発展を目指す

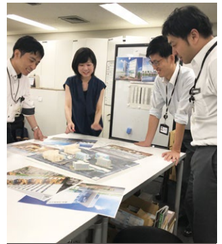
中庭回廊型キャンパスを目指すことによって、これまで過密になっていた校舎群を、精神的な中心を意識しながら、将来にわたりその時代に即したディテールで段階的かつ持続的に整備していくことを可能にします。古来の修道院建築における回廊空間が自己の内面に向き合ったり学習やコミュニケーションの場であったことも想起して、中庭回廊がキャンパスの将来にわたる発展の骨格としてあり続けることを考えました。

MORINOMIYA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCES PROJECT

YUKA NORIKOSHI ／ YUKI SHIMURA ／ YUKI TSUTSUMI ／ YOSHINOBU GAMACHI

学生が自慢できる『学び舎』を目指して

―新しいコミュニケーション空間の実現に向けて―



乗越　由香　意匠設計　2012年入社
志村　雄輝　構造設計　2015年入社
堤　裕樹　設備設計　2011年入社
蒲池　嘉展　電気設計　1998年入社

MORINOMIYA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCES PROJECT
森／宮医療大学　新校舎新築計画

外観パース

2Fカフェ

キャナルデッキ

コンペを勝ち取る

医療系総合大学として、診療放射線技師養成の学科新設にあたり、新校舎を新築する計画です。

「学生が集う、自慢できる学び舎」をテーマに、①街に開かれたデザイン②新しいコミュニケーション空間③細やかな配慮をキーワードに提案を行いました。

敷地南東側には、キャナル（人工運河）が流れています。眺望の良い南東側に回遊性のある階段状の“キャナルデッキ”を設け、各階共用部と一体空間として利用することで生まれる、コミュニケーション空間を提案しました。

白を基調とすることで既存キャンパスと調和し、階段状のキャナルデッキにより街に開かれた大学を目指しました。

女性専用のコミュニケーションラウンジには鞄・傘用のフックを設け、落ち着いて化粧直しが行える独立型のパウダースペース、ゆったりとしたソファーゾーン等、女子学生に配慮した細かい提案を行いました。

プレゼンテーションでは自ら（乗越）がプレゼンを行い、想いを伝え、階段状の特徴的な建物形状と女性目線での提案が非常に良いと評価を頂きました。

想いをカタチにする過程

この建物で一番のポイントとなっているキャナルデッキ。そのデッキへのアプローチ部分は室内外で段差のない一体感のある空間になるよう、関係者と打合を重ね、検討を行いました。2階のカフェは、従来の学生食堂ではない、街中のカフェのような空間にしたいとのことで、新しい空間を模索中です。今後は、家具等も含めてトータルで空間の作り込みを行っていきます。

まだ基本設計途中ですが、施主要望をさらに具現化させ、最終的にはみんなが満足する「学生が集う、自慢できる学び舎」を完成させたいです。

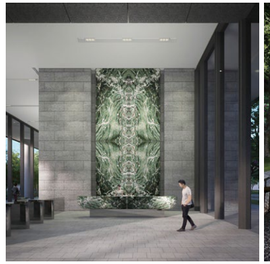
ジャカルタ最高グレードのコンドミニアムを創りこむ

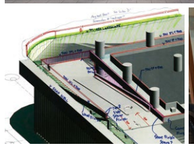
―重厚な気配漂う既存敷地内にふさわしいツインタワーを―

DHARMAWANGSA TOWERS PROJECT
KANISHKA SUDEEP ／ JOYCE TEO ／ LINTON PANJAITAN ／ FRANCISCO LEOCADIO ／ ANGKUI YUVENCIO ／ CANTON EMERALD ／ VIZA TISTAMARA ／ GDE ADITYA ／ SRI WULANDARI ／

ハリアント	意匠設計	1988年入社
王　富江	意匠設計	2009年入社
エメラルド	意匠設計	2006年入社
ヴィザ	意匠設計	2011年入社
アディティヤ	意匠設計	2014年入社
ウーラン	意匠設計	2014年入社
カニシカ	構造設計	2011年入社
ジョイス	構造設計	2014年入社
リントン	設備設計	2016年入社
レオカディオ	電気設計	2016年入社

DHARMAWANGSA TOWERS PROJECT
ダルマワンサタワープロジェクト





ダルマワンサ × ケリーヒル

計画地はジャカルタでも有数の閑静な住宅街です。クライアントは敷地内にダルマワンサホテル・高級コンドミニアムを運営するダルマワンサグループと日本のデベロッパーである東京建物の共同出資会社です。本施設は、敷地内最後のプロジェクトとして計画された高級コンドミニアムとプライベートオフィスであり、そのデザインアーキテクトとしてオーナーが選んだのがケリーヒルでした。

既存建物郡と周辺環境が織り成す落ち着いたコンテクストの中に、凛とそびえる二つの新たなボリュームをどう作りこむかが課題となります。

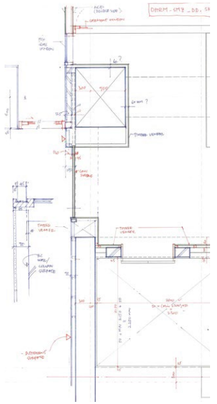
ジャカルタ最高級グレード

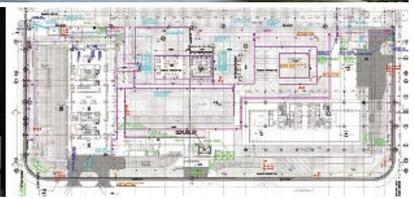
コンドミニアムはジャカルタにおける最高級グレードであり、オフィス棟もCEOクラスの使うプライベートオフィスを想定しています。動線・レイアウト・材料など全てにおいて高いグレードが求められると同時に、日本のデベロッパーの期待する品質も加わります。端正なファサードの中にいかに心地よい空間を創りこむかを考え、設計に取り組んでいます。

設計チームの取りまとめとして

デザインアーキテクトを含む設計各コンサル（在シンガポール・レバノン・ジャカルタ等）を最終的にリードアーキテクト&エンジニアとして取りまとめる必要があります。現地スタンダードや施工性を考慮しつつ、いかにして客先の求める品質を実現するかもテーマの一つです。

シミズチームはジャカルタ設計室とシンガポール設計室による協働チームで臨んでいます。Web会議やクラウドをフル活用し、距離を感じさせないシームレスな環境でチームワークよく設計を進めています。





< To achieve project! >

Harjanto : It has been a challenging and also exciting journey for me to be part of IDD Jakarta and to be involved in detail design for this project, which is one of the last masterpiece of the 'Master Architect' Kerry Hill.

Aditya : Indeed, it has been a great honor working side by side with the late Architect Kerry Hill.

Emerald : Kerry Hill and Dharma Tatemono delivers enthusiasm to achieve highest grade of design for this project. Joining from IDD Singapore, it stretches my ability whilst experience working with dedicated team of IDD Jakarta.

Wulan : As youngest architect in IDD Jakarta, I persevere my work to meet project' s expectation. Personally, to understand the strong character of project and to enhance its element is a challenging one. Working with world renowned Architect, endless design aspect can be learnt which really make me proud.

Linton : A Multi-cultural team with diverse characters, perspectives, and thoughts converge into one entity. I believe this creates more positivity and provides unique opportunity to collaborate as a mechanical engineer in such condition!

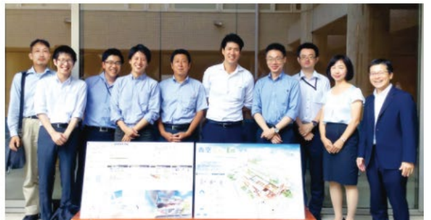
Viza : To design/build a high rise projects is one of my heart desire. Being involved in this project, with 'highest grade' to be built in Jakarta gives me a lot of excitement and achievement. Truly, Today' s Work is Tomorrow' s Heritage!

2018 AIJ Competition
TEMPO MONOHI KODOI／TOMOHIRO ICHIMANDA／SHOU IWATA／MASATO SHINDO／KAZUTOSHI ADACHI／KEIGO NOMURA／AKIKO MURATA／HIROAKI NOTAKE／KEIICHI SUZUKI

日本建築学会　技術部門で最優秀賞受賞

―若手設計者でコンペを振り返る―

今年度の課題は、「中高層建築に設ける火災に安全な保育施設・高齢者施設」。近年、保育施設・高齢者施設が高層階に設置される事例が多くなっていますが、自力避難が困難な乳幼児・高齢者の安全性が課題となっています。誰もが安全・安心に過ごすことができ、かつ魅力的な施設を提案することが求められていました。



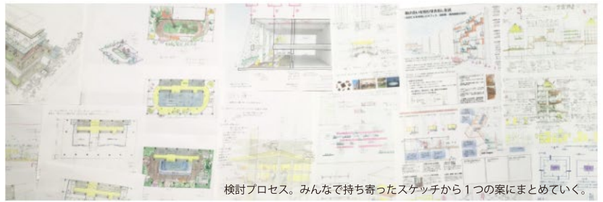
端野　亮一	意匠設計	2004年入社	安達　一喜	構造設計	2010年入社
小土井　元規	意匠設計	2013年入社	野村　圭吾	設備設計	2004年入社
一万田　知宏	意匠設計	2014年入社	村田　明子	技術研究所	2004年入社
岩田　翔	意匠設計	2014年入社	野竹　宏彰	技術研究所	2004年入社
進藤　正人	意匠設計	2014年入社	鈴木　圭一	技術研究所	2004年入社

2018 AIJ Competition
2018 年度日本建築学会技術部門設計競技
「青空 Co-En」

「いつも」が「もしも」に活きる

岩田：私たちの提案のテーマは「いつもがもしもに活きる」ということでした。課題に取組むにあたり、実際に保育施設を訪れ、現場の声を聞く中で、子供たちが普段使いなれない道や階段を避難に使うのが難しいという切実な課題がありました。

進藤：技術提案のコンペだったので夢物語でなく、近い将来実現できる案にしたいという思いもありましたよね。そうすると施主のニーズやコストを考えたときに、いくら建物の安全性を高めても、それだけでは施主のメリットにはなりにくい、「もしも」だけでなく「いつも」の生活の魅力を強く高めていく提案にしなくてはならないと、スタディ過程で気が付きました。



検討プロセス。みんなで持ち寄ったスケッチから１つの案にまとめていく。

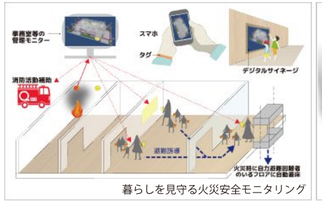
若手設計者でコンペを振り返る

表彰式後のパネルディスカッション風景

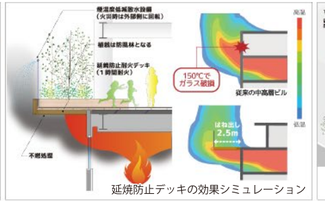
交流が生まれるコンバージョン

一万田：結果としてできた案は、一言で語るには難しいですが（笑）、既存ビルの上層部を改修して、立体的な公園をつくり、その中に「いつも」と「もしも」の両方に寄与する設備を散りばめながら、空間をつくるという案になりました。都市の中でも光あふれる縁側空間が、下階からの火炎の広がりを防止する装置になっていたり、地域の人やオフィスワーカーも集う大きな広場が、避難に大きく貢献する一時避難スペースになっていたり。

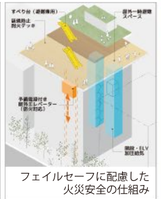
小土井：いろいろな人が集まる場所というのも私たちの案では大きなポイントでした。災害時には、避難をサポートする人手が必要になりますが、もしものためだけにスタッフを増やすことは現実的でない。自衛消防隊の提唱等もされていますが、なかなか普及していかないのも事実です。今回も普段から助け合いが育まれるコミュニティを形成するための仕掛けづくりを提案していますが、実際に災害時も機能するコミュニティがつくれるかという点で難しい課題として残っていますね。



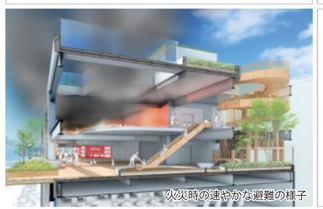
暮らしを見守る火災安全モニタリング



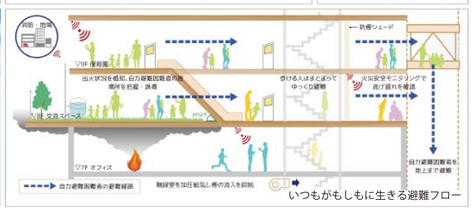
延焼防止デッキの効果シミュレーション



フェイルセーフに配慮した火災安全の仕組み



火災時の速やかな避難の様子



いつもがもしもに生きる避難フロー

情報
IoTとBIMデータによる状況モニタリング
建築
青空
Co-En
コミュニティ
年代代交流から生まれる連帯力の助け合い
屋外一時避難スペース
屋外一時避難スペース
ウッドデッキ
ウッドデッキ
ウッドデッキ

天使大学キャンパスマスタープラン *4

建築主 ： 学校法人天使学園
主要用途： 大学
敷地面積： 約10,000 ㎡
延床面積： 約17,000 ㎡
竣工年： 2047年(創立100周年)
所在地 ： 北海道札幌市東区北13条東3-1-30

森ノ宮医療大学 新校舎新築計画

建築主 ： 学校法人森ノ宮医療学園
主要用途： 大学
敷地面積： 4,060.99㎡
建築面積： 1,505.62㎡
延床面積： 5,465.76㎡
構　造 ： S造
規　模 ： 地上5階
竣工年 ： 2020年
所在地 ： 大阪市住之江区南港北1-40-3

ダルマワンサタワープロジェクト *1

建築主 ： PT. DHARMA TATEMONO RESIDENCE
PT. DHARMA TATEMONO PROPERTY
主要用途： 分譲住宅・事務所
敷地面積： 15,757 ㎡
建築面積： 3,483.26㎡
延床面積： 128,331 ㎡
構　造 ： RC造
規　模 ： 地上24階・地下4階
竣工年 ： 2021年
所在地 ： JL. DARMAWANGSA VII NO.7/JL. DARMAWANGSA RAYA NO.39 BLOK P/II/JL. BRAWIJAYA RAYA BLOK P/II KEL. PULO, KEC. KEBAYORAN BARU, JAKSEL

石屋製菓株式会社北広島工場

建築主 ： 石屋製菓株式会社
主要用途： 食品工場
敷地面積： 22,042.52㎡
建築面積： 9,257.14㎡
延床面積： 18,802.06㎡
構　造 ： S造
規　模 ： 地上3階
竣工年 ： 2019年
所在地 ： 北海道北広島市中央6-14-1

博多第一幼稚園

建築主 ： 学校法人博多学園
主要用途： 幼稚園
敷地面積： 22,210.11㎡
建築面積： 907.91㎡
延床面積： 1,322.83㎡
構　造 ： RC造
規　模 ： 地上2階
竣工年 ： 2017年
所在地 ： 福岡県糟屋郡志免町桜丘1-28

W.atelierショールーム

建築主 ： W.Atelier Inc
主要用途： ショールーム
延床面積： 1,585 ㎡
構　造 ： RC造
竣工年 ： 2017年
所在地 ： 201 Henderson Road, #03-01, シンガポール 159545

ヤマダヤ本社建替計画

建築主 ： ヤマダヤ株式会社
主要用途： 事務所
敷地面積： 1,607.47㎡
建築面積： 1,419.27㎡
延床面積： 5,569.72㎡
構　造 ： S造
規　模 ： 地上10階
竣工年 ： 2019年
所在地 ： 愛知県名古屋市西区城西1-3-5

関西キユーピー新築工事

建築主 ： キユーピー株式会社
主要用途： 工場
敷地面積： 29,497.88㎡
建築面積： 4,175.70㎡
延床面積： 19,111.85㎡
構　造 ： S造
規　模 ： 地上5階
竣工年 ： 2019年
所在地 ： 兵庫県尼崎市猪名寺3-4-1

秋田放送新社屋

建築主 ： 株式会社秋田放送
主要用途： テレビスタジオ(放送局舎)
敷地面積： 4,933.61㎡
建築面積： 1,951.56㎡
延床面積： 4,963.69㎡
構　造 ： S造
規　模 ： 地上3階
竣工年 ： 2019年
所在地 ： 秋田県秋田市中通7-1-1

カンファレンススタジオフクラシア丸の内オアゾ

建築主 ： 株式会社マックスパート
主要用途： 貸し会議室
延床面積： 1,953 ㎡
構　造 ： S造一部SRC造
規　模 ： 地上29階・地下4階の内15階・16階
竣工年 ： 2017年
所在地 ： 東京都千代田区丸の内1-6-1

ホテルフクラシア晴海

建築主 ： 株式会社マックスパート
主要用途： 研修特化型ホテル
敷地面積： 2,220.24㎡
建築面積： 1,972.70㎡
延床面積： 12,776.97㎡
構　造 ： SRC造
規　模 ： 地上10階・地下1階
竣工年 ： 2018年
所在地 ： 東京都中央区晴海3-8-1

釧之助本店

建築主 ： 株式会社マルサ笹谷商店
主要用途： 物販店舗・飲食・水族館
敷地面積： 4,413.89㎡
建築面積： 1,986.87㎡
延床面積： 3,150.01㎡
構　造 ： S造
規　模 ： 地上2階
竣工年 ： 2018年
所在地 ： 北海道釧路郡釧路町光和4-11

南通キユーピー 事務棟

建築主 ： 南通丘比食品有限公司
主要用途： 事務棟
敷地面積： 28,121 ㎡
建築面積： 14,796 ㎡ (内事務棟1,515㎡)
延床面積： 15,771 ㎡ (内事務棟2,647.5㎡)
構　造 ： RC造
規　模 ： 地上2階
竣工年 ： 2016年
所在地 ： 123 Tongsheng Ave, Nantong, Jiangsu, China

新千歳空港国内線旅客ターミナルビル改修工事

建築主 ： 空港ビル・新千歳空港ターミナルビルディング株式会社
ANAウンリュ：全日本空輸株式会社
主要用途： 空港取扱施設
敷地面積： 150,373.85㎡
建築面積： 52,656.85㎡
延床面積： 278,257.83㎡
構　造 ： S造・RC造
規　模 ： 地上5階・地下1階
竣工年 ： 2018年
所在地 ： 北海道千歳市美々 新千歳空港内

TMGあさか医療センター

建築主 ： 医療法人社団武蔵野会
主要用途： 病院
敷地面積： 23,434.56㎡
建築面積： 4,887.05㎡
延床面積： 25,509.23㎡
構　造 ： RC造一部S造(ハイエコス工法)・免震構造
規　模 ： 地上7階
竣工年 ： 2017年
所在地 ： 埼玉県朝霞市溝沼1340-1

東京成徳大学 6号館 グローバルセンター

建築主 ： 学校法人東京成徳学園
主要用途： 大学
敷地面積： 19,555.10㎡
建築面積： 1,430.01㎡
延床面積： 6,973.42㎡
構　造 ： RC造一部S造
規　模 ： 地上6階
竣工年 ： 2018年
所在地 ： 東京都北区十条台1-7-13

日本女子大学目白キャンパス将来構想 図書館棟 *1

建築主 ： 学校法人日本女子大学
主要用途： 大学
敷地面積： 3,378.45㎡
建築面積： 1,941.56㎡
延床面積： 6,793.04㎡
構　造 ： S造・RC造
規　模 ： 地上4階・地下1階
竣工年 ： 2019年
所在地 ： 東京都文京区目白台1-39-3, 40

テレビ新広島新社屋 *1

建築主 ： 株式会社テレビ新広島
主要用途： 事務所・テレビスタジオ
敷地面積： 5,687.67㎡
建築面積： 1,547.06㎡
延床面積： 8,074.23㎡
構　造 ： S造(基礎免震)
規　模 ： 地上6階
竣工年 ： 2020年
所在地 ： 広島県広島市南区出汐2-3-19

G-BASE田町 *1,2,3

建築主 ： 三井不動産株式会社・清水建設株式会社
主要用途： 事務所・店舗
敷地面積： 2,331.34㎡
建築面積： 1,462.47㎡
延床面積： 18,242.07㎡
構　造 ： S造
規　模 ： 地上18階
竣工年 ： 2018年
所在地 ： 東京都港区芝5-29

三菱鉛筆新本社プロジェクト *1

建築主 ： 三菱鉛筆株式会社
主要用途： 事務所・研究所
敷地面積： 4,835.76㎡
建築面積： 2,551.44㎡
延床面積： 14,047.09㎡
構　造 ： S造
規　模 ： 地上6階
竣工年 ： 2018年
所在地 ： 東京都品川区東大井5-23-37

秋葉原アイマークビル

建築主 ： 清水建設株式会社
主要用途： 事務所
敷地面積： 1,840.43㎡
建築面積： 1,386.25㎡
延床面積： 16,014.11㎡
構　造 ： RC造・S造一部SRC造
規　模 ： 地上12階
竣工年 ： 2018年
所在地 ： 東京都台東区台東1-30

穴八幡宮 布袋尊覆屋・御手洗舎・御井舎

建築主 ： 宗教法人穴八幡宮
主要用途： 神社
敷地面積： 10,867.81㎡
建築面積： 23.85㎡ (3棟合計)
延床面積： 17.27㎡ (3棟合計)
構　造 ： 布袋尊覆屋・御手洗舎：木造／御井舎：RC造
規　模 ： 布袋尊覆屋・御手洗舎：地上1階／御井舎：地上1階
竣工年 ： 2018年
所在地 ： 東京都新宿区西早稲田2-1-11

福岡空港貨物施設移転整備事業 *1

建築主 ： 福岡空港ビルディング株式会社
主要用途： 倉庫他
敷地面積： 58,090.17㎡
建築面積： 28,717.30㎡ (スーパーウィング建屋は11,792.05㎡)
延床面積： 34,420.32㎡ (スーパーウィング建屋は13,171.37㎡)
構　造 ： S造
規　模 ： 地上4階(スーパーウィング建屋は地上2階建)
竣工年 ： 2018年
所在地 ： 福岡市博多区大字上日井字柳井(福岡空港内)

習志野市 新庁舎 *1

建築主 ： 習志野市
主要用途： 市庁舎・土木作業員詰所・自動車車庫・自転車駐車場
敷地面積： 22,403.89㎡
建築面積： 4,971.45㎡
延床面積： 19,274.74㎡
構　造 ： S造一一部SRC造(基礎免震構造)
規　模 ： 地上6階・地下1階
竣工年 ： 2018年
所在地 ： 千葉県習志野市鷺沼2-1-1

松戸市立総合医療センター *1

建築主 ： 松戸市・松戸市病院事業管理者
主要用途： 病院
敷地面積： 55,750.13㎡
建築面積： 8,792.70㎡
延床面積： 47,020.72㎡
構　造 ： RC造一一部S造
規　模 ： 地上9階
竣工年 ： 2017年
所在地 ： 千葉県松戸市千駄堀993-1

東京大学総合図書館 別館 *1

建築主 ： 国立大学法人東京大学
主要用途： 大学
敷地面積： 403,516.09㎡
建築面積： 149,116.36㎡
延床面積： 854,608.33㎡
構　造 ： RC造一一部S造
規　模 ： 地上1階・地下4階
竣工年 ： 2016年
所在地 ： 東京都文京区本郷7-1-1外

東映アニメーション新大泉スタジオ

建築主 ： 東映アニメーション株式会社
主要用途： アニメーション制作スタジオ
敷地面積： 5,600.77㎡
建築面積： 2,771.93㎡
延床面積： 9,804.31㎡
構　造 ： S造(CFT造)・免震構造
規　模 ： 地上4階・地下1階
竣工年 ： 2017年
所在地 ： 東京都練馬区東大泉2-10-5

ヒューリック渋谷公園通りビル

建築主 ： ヒューリック株式会社
主要用途： 物販店舗・サービス店舗・飲食店
敷地面積： 740.93㎡
建築面積： 670.73㎡
延床面積： 5,306.93㎡
構　造 ： S造・SRC造
規　模 ： 地上9階・地下1階
竣工年 ： 2017年
所在地 ： 東京都渋谷区宇田川町3-7

*1 他社協働（設計：清水建設）

習志野市 新庁舎
基本設計・工事監理：株式会社佐藤総合計画
サイン計画ディレクション・デザイン：エモーショナル・スペース・デザイン　渡辺 太郎・佐野 裕次

松戸市立総合医療センター
基本設計・実施設計監修・工事監理：株式会社佐藤総合計画

東京大学総合図書館 別館
東京大学川添研究室（設計監修）

G-BASE 田町
デザイン監修：佐藤尚巳建築研究所
アートデザイン：山崎若菜
外構照明デザイン：ICE 都市環境照明研究所
エントランス幕天井照明演出：コマデン

三菱鉛筆新本社プロジェクト
基本設計：株式会社プランテック総合計画事務所
工事監理：株式会社三菱地所設計

福岡空港貨物施設移転整備事業
株式会社三菱地所設計

日本女子大学目白キャンパス将来構想 図書館棟
妹島和世建築設計事務所

テレビ新広島新社屋
コンピューテーショナルデザイン：広島工業大学杉田宗研究室

ダルマワンサタワープロジェクト
クリーヒルアーキテクト

*2 インテリアデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス

*3 ランドスケープデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス

*4 共同提案者

天使大学キャンパスマスタープラン
株式会社山下 PMC

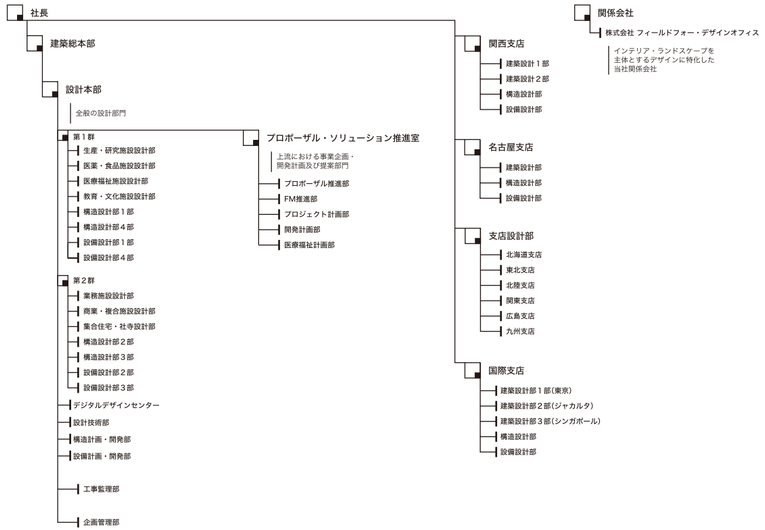
stream 2018 DEW

委員長　大橋　一智
副委員長　根岸　健一
委員　小川　浩平
加藤ひかる
佐藤　慎平
安田　諭史
富田　潤
安田　翔太
磯和　孝史
菊池　明
笹村　佳央
今川　彩香
重盛　洸
宮本　和明
早川　昇
藤野　太知
矢野光一郎
野村　綾子
加藤　直樹
井坂恵美子
河野　亮太
高木　伸太
山田　康平
山田奈津子
事務局　小島　哲

stream DEW

「潮流=ストリーム（stream）の源流は雫（DEW）にある」。
「個々人の創造性発露が社員相互の啓発・情報共有の源であり、それが大きな流れとなる」という意味をこめて、2007年に命名。

全国設計・プロポーザル系組織図　（2018.9 月現在）



発　行　日　2018年10月
編集・発行　清水建設株式会社
／設計本部
〒104-8370 中央区京橋2-16-1
03-3561-1111（代）
編集事務局　設計本部
企画管理部
印　刷　所　（株）ピーディーシステム
年１回発行予定

非売品